
元暗殺者現執事

やもめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元暗殺者現執事

【Nコード】

N5365Y

【作者名】

やもめ

【あらすじ】

魔法と現代科学が混在する世界観。元暗殺者で、今は命の恩人であり、大切に愛しいお嬢様の為なら何でもして、お嬢様を狙う敵を容赦せず殺す執事のチェーニ・スキアと、将来は魔術師の中でトップを取る逸材のお嬢様と呼ばれるイルミナル公爵家長女リュミエール。チェーニはお嬢様のそばに居れば満足。リュミエールは完全に独占欲があるが、チェーニに対して負い目があり接近出来ない。そして第三者介入もあり…。基本的にチェーニ視点で、リュミエール万歳の独白が多いです。また他の視点も入れる予定。人が死にま

す。

生きがいを見つけました（前書き）

後輩のアカウントを使用しています。
私の書いた作品はこれだけです。

生きがいを見つけました

ここは青い惑星で、大陸は非常に大きいここ、ダーリア大陸のみで大陸周りに10万を超える島が存在する八割海の本当に青いだけの惑星です。

そして私達の居るシルバニア王国は大陸の東側の魔術師と科学が共存する伝統主義陣営の国家の一つです。

昔は技術が無かったので、魔術師は重宝されましたが、科学が発展すると、暴走すれば大量破壊、暗殺や禁術の呪いなどが危険と手のひら返りで活躍の場は無くなっていきました。

現在は術の使用を外では原則厳禁とし、主に戦場や病院の回復魔法や闘技の見せ物以外には使われなくなっていました。

まあそれ以前に、伝統主義陣営以外の国では自由結婚で魔術師の血が薄れて魔術師の数は極端に減っていますが：

そんな中でもこの王国は特異な国で、

まず国王が魔術師、貴族も魔術師か旧騎士家系

本家伝統至上主義国家なのです。

至上主義と言っても、当然一般国民が大半なので現代技術も持ち合わせています。

しかし大陸では数校しかなく、その中でも最高峰の魔術学園を有し、魔術院を国家機関として存在するのですから気合いの入れ方が違います。

まあ、ここまでで説明は終えましょう。

それでは私がなぜ執事をしてるかつて？
まあ簡単な話拾われました。

簡単な暗殺任務と思いきや、クライアントが馬鹿で逆襲された挙げ
句私を売り。

突如呼ばれて行ってみれば、暗殺対象の小隊規模の私設兵隊に囲ま
れました。

全員殺しましたが、傷を負ってしまい血を失い、雨にも降られ、住
宅地区の反対側の人の居ない所で動けなくなり、死を覚悟しました。

しかし悪運が良く、気付いたらイルミナル公爵家のベッドの上に居
ました。

そしてそこで会ったのが魔術師として将来有望な長女リュミエール
様。

彼女は典型的な箱入り娘で、無口無表情の自分に笑顔で献身的で更
に朗らかで、最初は警戒してたが、段々と彼女に惹かれていきまし
た。

しかし当主ガルモンド様は私を見抜いていました。

私は告発と死刑を覚悟しました。

「娘の執事であり兵となってくれないか？」

ガルモンド様の言葉でした。

告発をしない代わりに、反魔術過激派の人間からリュミエール様を
死守する。

私は初めて運命というものを感じました。
恩返し以上にあの方に仕えられる。

短い期間で完全に壊れましたさ、ええ。

そして三年経った現在。

「おはようございます。チエーニさん」

「おはようございますお嬢様」

公の場ではしっかりしても、今は少し眠そうに目をこする愛しい方、それが命がけで守っている大切な方。彼女の為なら喜んで戦いましょう。

変態？それがなんです？

朝の風景（前書き）

まだ平和です。

執事はどんどんこわれてく…

銃器はアカウントを貸してもらっている後輩の夕霧に聞きました。

朝の風景

0625

お嬢様起床

いつも通りの起床、しかし学院の生徒会で予算編成の確認で就寝が遅かった為に眠そうだ。

私があつても守るリユミールお嬢様は、大陸に数校で、そして最高峰の12年制魔術専門学院、フェルザーノ王立学院の高等部生徒会長を最年少6年生から現在9年生まで続け、卒業までその地位は確固たるものと言われております。

まあお嬢様の素晴らしいお顔に隈はいけませんので、化粧スタッフが隠すとして、私はまず朝食のセッティングをしなければ：

ああ、ちなみに当主のガルモンド様は現在王都に出張しており、奥様、メリアナ様はイルミナル家が経営している病院の大陸中央進出の為にいらっしやいません。

決して親子仲は悪いわけではなく、むしろ溺愛しています。

証拠に私の首にはお嬢様に不埒な事をした瞬間に死ぬ呪いがかかっています、別に構いません。それで近くに居れるなら。

食堂には既に2人が準備している

「フェン、ユウ、準備は？」

「完了です、チェーニさん」

「無事故98日目達成です！」

「当たり前だ」

上は細身の従僕兼お嬢様専属運転手のフェン・カシウス。

元は王国軍の中尉だったが、とある理由で二年前にここに来た。

下はお嬢様専属メイドでこの国では珍しい黒髪のユウ・ナミエであ

る。

彼女は一応普通の出だが、数枚同時食器破壊「一枚で国民の平均月収相当」、通称「デス・スクリーム」を普通にやらかす、ちまたではドジっ娘というものらしいが、実際は殺意の対象にしかない。それでもクビにならないのはあまりに無邪気で純粹で、チエーニですら殺意を通り越してあきれて、そして何だか気にかけてしまうのだから恐ろしい子。

既にセッティングは完了しており、皺一つない完璧な仕上がりである。

しばらく待つと

「おはようございます、皆さん」

「「おはようございますお嬢様」」「

制服姿のお嬢様が入室する。

彼女は使用人にもしっかりと挨拶するお方であるので、朝から気持ちが良い。

素早く席を引き、座るのを確認してから料理をお出しする。

今日はシンプルに甘さ控えめのパンケーキである。

朝が苦手な方ですので、とりあえず収めて欲しいので。

彼女はパンケーキを食べると

「美味しい」

と顔を綻ばせる。

それを見るだけで私はどんな事よりも嬉しく感じます。

1から100まで良い所を挙げる言うなら私は1000は答えられる自信があります。

「ごちそうさまでした」

ユイの両親の故郷では食の大切さと、生命感謝の言葉があると聞き、それを素直に実行するお嬢様の態度には感動を覚えます。

「そろそろ学校の時間ですか」

「お嬢様、車を回しておきますので準備を」

「分かりました。お願いします」

「はっ」

恭しく頭を下げる。お嬢様が退室すると、フェンは車を出しに、ユウは手早く片付けを始める。

いついかなる場合でもゼロコンマ以内に銃で敵をしとめなければならぬ。

懐に入れる愛銃、SIG SAUER P220を確認、弾倉も2本ある。

近接格闘に発展した時のサバイバルナイフも常備する。

時間にして数分、零点補正も済み銃をしまう。

屋敷から出れば

「チエーニさん、外は異常無しです」

王国では最高級車の黒塗りセダンを回したフェンが報告する。

常に敵が潜んで無いか警戒し、いかなる場合においてもお嬢様を逃がす。それが鉄則である。

お嬢様が命が常に狙われているのは周知の事実であり、お嬢様自身も自覚している所があるからこそ絶対に不安にさせない為に命を賭ける。

「遅れてごめんなさい！」

少し息を乱しながら外にでるお嬢様、長い廊下を走ってきたのが分かる。

「いえいえ、完全に間に合いますので、ゆっくりでも」

「でも待たせたくなって」

そんな申し訳なさそうに上目使いでその言葉、

狙っている？と一部の人は言うかもしれない、それでも私には一撃必殺です。

とにかくそんな悶絶は顔には出さず、ドアを開けて中へ導く。お嬢様に乗るのを確認すると

「ユウ、家の事は任せた」

「了解です！チエーニさん！」

見送りに来たユウが元気良く返答する。本当に頼んだぞ……
少し不安を持ちながら、車は学院へと動き出す…。

朝の風景（後書き）

次回は学院編、ハーレム要素も入れます。

記者さん

07:30

「しかし、昨夜は随分と遅い就寝でしたが…」

フェルザーノ学院までは車で約40分かかるが、それでも圧倒的に近い方だ。遠い人は大陸西端で2万kmある為当然学院内寮に住む。しかし車内の時間も時間なので、時折雑談もある。

「ん、まあ予算でちよつとね… 昨年の文化祭予算を今年は約20%上にしると。創立300周年記念式典同時開催があるからという理由で」

「それは… いささか多すぎでは？」

フェルザーノの文化祭は伝統に名を恥じぬ豪華さで、一般国民に魔術師の良さを知ってもらったための一大行事であり、予算配分も自ずと大きくなる。そこに二割増しは大きすぎる

「生徒数はほぼ一定で、予算も増徴でこの要求、しかも最高の理事会「卒業生で国に貢献した人が天下り仕切る。老害とも言う」から何とかして最高10%増までに留めないと、それでも部費の削減も視野に入れないと… きついわ…」

仕事モードの凛々しいお姿をじっくり見ようと思ったのに…

「ちっ… 3か…」

下手な隠密の人間2人と高度な手練れが1人、多分そいつは挑戦状だろう。

素早く指で

「ビル上、3、警戒せよ」

フェンは前を向きながら軽く頷く。

おそらくは偵察だが、一応はSIGをスーツ「燕尾服は柄ではない」上から触る。

「ちよつと、聞いてますか？」

「え、あ、申し訳ありません、少し…」

「もう、チエー二さん」

「申し訳ありません」

お嬢様は少し拗ねたような可愛らしい声で全くもって怖くない睨みをする。

さっきの凜々しい姿が見れなかった分も十分埋め合わせる顔です。

本当にありがとうございます。

しかし敵がうざいな…どう始末しよう…。

人差し指を曲げて無意識に唇に当てる。

その動作をバックミラー越しで見たりリュミエールは少し悲しそうな顔になったのを2人は気づかなかった。

0800hrs

フェルザーノ王立学院

正門には朝早い生徒達で既に賑わって、ロータリーには高級車が停まり、運転手や執事が降りて生徒を下ろす。

その中で

「来たわ、イルミナルさんよ…」

「生徒会長がいらっしゃったぞ！」

一際高級車が正門ロータリーの一帯真ん中に停まる。

生徒達は今までのざわめきが変わり、校舎までの中央通りが十戒のごとく人波が切り開く。

いつも通りに国王SPみたいな眼光鋭いイケメン執事がドアを開けると

「おはようございます」

頭を下げる女性に全員が頭を下げたり見惚れたりする。

この名門フェルザーノ王立学院において歴史上最強にして最高の生徒会会長、リュミエール・イルミナルの登校である。

毎度この光景を見ると、いかにお嬢様が凄いかが分かる。

まあそうだ、ここまで容貌整って性格良く最強で絶対権力の理事会を歴代では有り得なかったねじ伏せるという事もやってのけたお方なのですから！

「チエー二さんありがとうございます」

「いいえ、お氣をつけて」

完全学校モードのお嬢様はさっきまでの笑顔でなく、淑女のように公爵家長女の笑いになる。

あの仮面は親友か学友でも特別な方以外には破れません。

執事は基本的に待機か、学生ならば執事養成コースという場所で厳しい訓練をこの学院で受けます。

しかし私は特例でお嬢様の盾となりひいては学院の皆様に害なすものの駆逐を任されていますので、授業妨害無ければ自由に動けます。

「さて…まずはさっきの敵が居るか…」

「見つけました！チエー二・スキアさん！」

「……ちっ…何だ？」

「今思いつきり舌打ちしませんでしたか？！しましたよね？！」

「気のせいだ、チビ」

「ひどっ！成長発展途上です！」

「さいですか…」

ひょっこりと現れたのは、「報道」の腕章を付けた女性。

フェルザーノ王立学院7年生、ヘッドフェル子爵家子女のレン・ヘッドフェル様だ。

15歳にしては身長が低いのでマスコットキャラ扱いであり、私にとっては面倒な相手である。なぜなら

「今日こそチエー二さんの強さの秘密を教えてくださいます！」

腕章通り、彼女はこの学院で購読率90%越えの週刊報の記者なのである。

しかもエースで簡単に引かないジャーナリズム魂を持っている。

「良く食べ良く寝て良く動く。それだけだ」

「ほうほう…、で、本当は？」

「だから「本当は？」…」

な、面倒だろ？

てか

「私に取材してメリットは？別の記事もあるでしょう」

「今、生徒会長リュミエール様に次いで注目高いのがあなたなのです！」

ずびし！と指される。

………はっ？

「趣旨が良く分からないのですが？」

「女性の救世主「メシア」！」

「ん？」

「校則違反の馬鹿共を叩きのめす人が、10人以上の女性の証言をあわせたら、特徴にあうのがあなたしか居ないんです！」

「ふむん…」

ああ、確か校則を破りみだりに平民階級の国外女生徒に権力振るつた貴族生徒が跋扈するから討伐してくれとお嬢様に命じられて…肅清と生徒会法廷に送った覚えが…正直お嬢様をお願いポーズ以外覚えていない。

「知らないな」

「そんな事ありません！第一、イルミナル家の執事は最強の傭兵という情報もあるのですから！」

思わず吹きそうになった。傭兵か…まあ似てて似ないが…いい加減うざいし、彼女を改めて脅威と認定する。

だがここで言われっ放しも癪なので…

「時にヘッドフェル様」

「レンでお願いです」

「…レン様、シークレットシューズは15より10cmがバレない秘訣です」

思わず顔がニヤリとする。

言われたレンは顔が真っ赤になり、俯いてしまう。罪悪感……ごぞい
ません

「それでは」

そのまま立ち去ると背後から

「絶対にあなたの正体見破るからな——！！！」

あ……火を付けたか？

しかし気にせずに目的地に向かう。

記者さん（後書き）

次回は少し際どいです。

妖艶なサボリ（前書き）

銃器解説は次回にやります。
少し内容が…

妖艶なサボリ

0830hrs

フェルザーノ王立学院中央塔屋上

そろそろHRが始まる頃、私はこの学院で一番高く、唯一遮蔽物が無く、学校周辺のビルが確認出来て、お嬢様の観察が出来るポイントに到着する。

ちなみに、お嬢様の観察はこれ重要。変態だつて？褒めないで下さい。

一通り生徒以外の不審的感覚は無く、敵が侵入している可能性は低い。
いや、下手に侵入すれば、学院の教師も応戦するので逆に敵にはきつい。

この中央塔は学院創立時から存在して、当時の最先端の魔術精製と彫刻から生み出された為に、学校のみならず大陸魔術師の象徴ともいえるモニュメントである。

敵がもし長距離狙撃を行うとすれば、ここから見えるはずだ。

塔の根元に隠してある、SIGP550を持ち見渡すが、敵の姿は感じられない。

「目標ロスト…か」

「残念ね？変態騎士さん」

上を振り向くと…

「何だ、セネルか」

「ふふっ…お久しぶりね、また邪魔者でも出たのかしら？」

長い紫髪に整った大人の色気すら感じ、さっきのレンとは違い出る所は出てる女性。

隣国で伝統主義陣営国家の一つ、ネルシア共和国の国費奨学生でここに来た一般国民でお嬢様と同じ9年生の、セネル・アラネスだ。

彼女とは既に何度か面識があり、というかここでサボっているのだから来れば会い、実際にこの中央塔から狙撃した場面にも立ち会っている人物である。

と、それよりも

「セネル、一応女性という事は自覚しておけ」

彼女が塔の柱の上から私を見下す形にあり、そして上を向くと、まあ見えるんだ。

しかし彼女はクスクス笑い

「前はチラリズムで煽って駄目だったから今回は勝負下着を大胆に晒してみたけど、興奮しない？」

「全く」

即答で断言しますよ。別に女性を見たいわけでないし、お嬢様の笑顔や無邪気さを見る方が遥かに良いものです。

「ふうん、ちよつと悔しいわね…よっ」

柱から飛び降りる。

だからもう少し隠せて、私は興味無くとも他人の心煽るのには十分なんだから

「チエーニさん、それは間違いです。逆にあなた以外には見せません」

「心読むな」

「さがですから」

しれつと言うが、彼女は生まれながらにして読心と対自白防止のスキルを持ち合わせている。

他にも魔術師はそのようなスキルを必ず一つ以上持ち、例えばレンは尋問スキル「訓練された私には効きません」

お嬢様は治癒強化と毒の自動排除のスキル。

さすがですお嬢様。

「私のつまらない心を見る暇あるなら授業に参加しなさい」

「んゝ、別に座学に関しては成績取れてますし、国費奨学生でも成績があれば伝統主義陣営の中でも意地張れるし」

「ちっ」

「うわゝ本心からやられた。ひどいですね」

泣いているフリするがそんなんでは沈むタマじゃない。

彼女は憎たらしく、まことに遺憾で不本意ですが成績はお嬢様がちろんダントツの首席ですが、彼女は三位を突き放しお嬢様を追従する形で次席を常に維持しています。

国外の庶子がしかも小国のネルシアの人間にしては有り得ないという事で、このまま次席維持してくれれば国際会議の場でも発言力が強くなる。

まるで学生を利用して魔術師の戦争縮図を見ている？

当たりです。

ここで築いた功績と人脈は後の伝統主義陣営のみならず大陸の国際会議をいかに有利に進めるかに直結しています。

「まっ、戻った所で悪口とどう私について行くかや体を見た下心しか見えないので、リュミエール大好きの変態騎士さんの心読む方が楽しいですし」

「余計な言葉が多すぎる、あと、リュミエール様だろ！」

「真剣な殺気出してむきに注意する所が可愛い」

最初の文だけなら読心に苦勞してる女性だが後半のから分かる通り凄く楽しんでいる。

「もついいやゝ敵もいな「本当に？」？」

何を言ってる？

「とりあえずもう一回見回しなさい」

セネル真剣な声にもう一度スコープ越しから見回して

「！、いつ気づいた？」

「ふふ、私も偶然生身の人間が見えて、あれは何？」

ここから600m、学院周辺のビルの上僅かにぼやりと視界が歪んでいるように見える。

「異世界？」

「そんなわけない、反魔術が魔術使うわけない。あれは光学迷彩だ」
「光学？」

セネルが小首を傾げる。そういう様の事すれは少しは

「可愛げある？」

「だから先読みするな…たく、あれは周りの映像を撮影して自分に
投射して姿を消す、最新鋭の隠密術、狙撃や防衛兵器を敵から見え
なくさせるんだ」

「幻属性魔術のステルスみたいなもの？」

「そう考えとけ、まあそんな最新鋭に頼るのは馬鹿が多い…無音魔
術頼む」

「もう使っただけ私を使っ…」

と言いながらも無詠唱で音を吸収する魔術をSIGにかける。

「ありがとさん」

不覚を取られたが、一度見破ればあまりにも楽な仕事で笑いそうに
なる、SIG P550を構える。

あれの致命的欠陥は、光学処理が間に合わなくて頭のように丸い部
分の動きが丸分かり、そして敵は油断してか良く見せてくれる。レ
クティクルを頭に合わせれば…

問答無用で引き金を引く、僅かゼロコンマ数秒、迷彩で隠せない紅
いモノがぼやけた所から飛び出し、倒れる。

軍用双眼鏡を覗いていた彼女は

「お見事」

微笑しながら拍手する。というか…

「まだ使っているのか？」

「ええ、中々空を楽しく見せて貰ってます」

「そうか」

その双眼鏡は、ここからの狙撃の時、無音魔術をやってもらう代わ
りの報酬に渡したものだ。

結構な支出だったがお嬢様に銃の発砲で不安にさせたくない思いが

あれば安い！！

「まっ、仕事は終わりだ。一応座学に出とけよ」

「素直に首を縦に振ると？」

「思わないな…じゃ、いつも通り口出しするな」

私は目標を殺して一応の平和を掴んだ事に安堵してからこれからの事を考え塔を降りる。

そしてチエー二の背中を見てるセネルは

「ふふ、あなたの事を諦めるなんて思わない事ね」

小さく舌なめずりしていた。

面倒な奴（前書き）

今回は男が登場します。

こいつは後々まで面倒な事を起こす予定。

登場人物

チエーニ・スキア

年齢、24あたり

身長176cm

体重70kg

年齢不確定のリュミエール専属執事になる前の記録は、あまり明かされてない。

しかし確かな事は、「殺戮機械」と呼ばれる程の凄腕の暗殺者で、一個小隊「約40名」に包囲されても、殲滅した実績がある。

銃器解説

夕霧監修

SIG SAUER P220

シグ&ゾン社開発のピストル。

汚れに強く堅牢で高精度の命中率を誇り、非常に信頼出来る傑作銃。価格は高いのが玉に瑕。しかし高くても納得して買える一品。

SIG SAUER P550

いかなる環境でも作動するタフさを持つ、世界の小銃に革新を与えたAKシリーズに似て、泥に浸かろうが、氷漬けにされようが、普通の小銃なら修理決定の環境にも決して負けず、普通にメンテナンスしたら、またほぼ元通りに使えるタフネスさと、AKを凌駕する

狙撃銃並みの命中率と射程を誇る。

しかしこれも価格が高い。

そして、P550の方が優秀だが、安い派生品に注目がいつてしまい、マイナーに……。

この作品では、チエーニは狙撃と近接で撃ちあうのに柔軟に対応する為に、闇商人からパーツを買い、狙撃能力を上げて、狙撃銃兼普通の突撃銃として使用している。

他にもまだある予定だが、それは随時発表する。

面倒な奴

1730hrs

フェルザーノ王立学院生徒会棟前広場

中央塔での仕事を終えてからは私は、見回りをしつつ、真剣な面持ちで授業にのぞむお嬢様を観察して、軍用の固形食をかじりつつ、学院で仲の良い方と談笑しながら昼食を取るお嬢様にほっこりし、校則違反の格好で下級生に不当な恐喝する不届き者を絞め倒しながら、魔術実習でお嬢様の素晴らしい火炎魔術の自在に操った芸術に感動して、そして今、シオルダーバックを肩にかけて生徒会棟前に居る。

王立学院は中央塔を中心に、東西南北に豪華な校舎が存在します。西からの正門から、東西に生徒の座学教室棟、南が魔術実習棟、北は食堂図書館など総合棟です。

そして東校舎棟より東には大規模な攻撃詠唱の演習地を含んだ体育グラウンド。

そして総合の隣に、生徒会棟が存在する。

生徒会棟は12年制の四年生以上から、教師からの推薦で候補者を決め、選挙を経て、選ばれた12名の者にしか入れない聖地であり、たとえ一般開放されても一階の大広間と生徒会に対して一般生徒の意見陳情の部屋以外は絶対に入室出来ないようにされています。

ちなみに会長であるお嬢様は毎年教師から支持率100%で推薦を受け、選挙結果も支持率100%なので、最早会長はお嬢様。

素晴らしい式だ。

その中では今、お嬢様を苦しめる老害……理事会の皆さんと生徒会が全面対決しているようです。

議題は朝おつしやてました、文化祭予算の大規模拡充の阻止。

お嬢様の手腕なら動かせると信じておりますが、もし駄目なようなら、ちよつと理事会のジジイどもに少し話しかけて、語りかけたいですが、お嬢様の性格ならそれを許してくれそうにありませんし黙ります。

さて、そろそろ会議開始から一時間は経過しています。確か緊急議題はこれ一つなのでそろそろ終了かと…

「あつ、お嬢様、お帰りなさいませ」

「チエー二さん、お疲れ様です」

「もつたいなきお言葉です」

「ふふ、大げさね」

お嬢様は私を見つけると微笑して労いの言葉をかけてくださる。本当にもつたいなさすぎる！録音出来るなら余す所なく録音したいです！

「それで、文化祭の方は…」

さあ、私が理事会の反応はいかに？！

お嬢様はベンチにしてはもつたないくらいの豪華な材料で製造された広場の椅子に座り

「見事目標越えの5%に収められました！これで他の予算も削らず、前年繰越の予備金で何とかあります」

お嬢様は微笑しながら、報告してくれる。成功は成功の大成功じゃないですか！

「それは喜ばしい事ですね」

「うん…でもね」

今度はシユンとしてしまう。

誰だ！誰がお嬢様をシユンとさせた？！で、この場に居るのは自分だけだから私か！私なのか！

「ど、どうしたんですか？」

動揺で軽く噛み気味だ。お嬢様は

「うん、確かに凄く喜ばしいけど、私の…私達生徒会の力だけじゃないの」

「は…はい？」

どういうことだ？あの教育省天下りで、全員この卒業生と変に威張る老害どもの理事会が動かせる権力は生徒会だけしかない。

そう考えると外部から、そして大きい権力…まさか

「今日は有意義な会議が出来ましたね、リュミエールさん」

ある一つの答えにたどり着く前に答えがやってきた。

「そうですね、フェルラ王子」

「嫌ですね、ここでは副会長です」

やって来たのは、この学院の１１年生で副会長、シルバニア王国国王が一子、フェルラ・シルバニア王子である。

対するお嬢様は

「そうですね」

こ…これは！学校モードでも最悪な完全な作り笑み。

聖女でどこまでも寛大なお嬢様は、余程の事が無い限りこの仮面はつけない。

この男、何をやらかした？いや、大体検討はつくが…

「それにしても、フェルラさん、あの紙は…」

「ああ、頭の固く自分本位な理事会の皆様にご自重してもらおうと」

「陛下に一筆したためていただいたと」

「まあそうですね、これで会議も円滑に済みまし、会長も大分楽になりましたでしょう？」

「ええ…まあ」

………お嬢様が怒りを持つ理由が分かった、てか予想通り過ぎた。はつきり言おう。この男、馬鹿だ。

お嬢様の性格をまるで分かっていない。

お嬢様はたとえ不利な戦いでも、逃げず、前に立ち、生徒の意見を尊重して時には無茶を厭わず、嫌みに対しても強靱な精神力と持ち前の優しさや凛々しさに惹かれた名も無き者達の奮闘により勝利を

掴んできた。

真正面馬鹿正直は馬鹿を見る世の中と吐き捨てる馬鹿も居るが、条件が揃い、真に人から支持される者は真正面馬鹿正直を貫けば、どんな裏工作でも現代科学が生んだ最悪な核兵器でも禁魔術よりも強いものを手に入れる。
それを体現したのがお嬢様である。

しかしこの王子は父親である国王陛下の文書というチートを使うだけの人間である。

確か三男のはずだから継承権第三位…神様、頼みます。間違ってもこいつだけは国王にしないで…。

「今後は私達、王立学院の生徒会のみで対処出来るように、精進しましょう」

「はあ、まあ会長がそうおっしゃいますならそうしましょう。ではフェルラは成功したのに何でお嬢様がイラついているのか分からないようだ。

しかも私の事がん無視だし。

まあ私の事はいいとしてお嬢様のプライド踏みにじった野郎には後で闇討ちしてやる。

と思っっていたら。

「悔しいな…」

「えっ…」

振り向くと、お嬢様が悔しさを滲ませ

「たった一筆に負けたなんて…、陛下なんて関係ない、負けは負けよ」

「お嬢様…」

なんて声かければいいか分からない。しかし次の瞬間立ち上がり

「だから次は負けない！副会長がまたあの手段を使う前に、理事会を屈服させます！」

「その意気ですお嬢様！」

自分自身で乗り越えようとするお嬢様に痺れる憧れるう！！
しかしまた次の瞬間

くうう…

さつきまで威勢良かったお嬢様はぺたんと座り込み、両手をお腹の上に置き、俯き

「…聞こえた？」

「ええ、可愛らしい音がしました」

「~~~~~！」

さつきまでの学校モードの仮面も全て脱ぎ捨てて、真っ赤になったお嬢様の顔。しかも上目使い。

ぐはっ！致死量手前の破壊力だ！

ちなみに致死量に達した場合の死因は嬉死「うれし」である。

「お昼ご飯、この会議緊張で食べれなくてね」

あたふた弁明するお嬢様、やめてくれ！致死量に達する！だが本望か、体は要求してくる！

まあ死ぬ前にお嬢様のために用意したものがある。

「お嬢様、じゃあこれを」

「え…あつ！」

私がバックから取り出したのはお嬢様が愛してやまない、庶民のパン屋さんのチョココロネ。

本来なら、学校や家にもたくさん高級な貴族が好むチョコがあるが、お嬢様はたまたま私が買ってきたチョココロネを食べてからすっかり虜になったようで、時々、皆にばれないように、買ってきている。もしこれが奥様や当主にはれたら…どうなるかな？

お嬢様は目を輝かせながら

「でも、買いに行く時間があつたの？」

「裏技ですよ、少し仲良くなった人に頼んで」

「へえ」

お嬢様は納得してくれる。

本当はさつき恐喝で絞め倒した不良生徒にパシラせて、買わせました。

まあ恐喝という重罪に学校脱走の罪が付くだけだし、別に大丈夫でしょ。

え？鬼畜だつて？誉めないで下さい照れるでしょう。

「いただいても？」

「どうぞ、今なら周りに人の気配は感じませんので」

「いただきます！」

お嬢様は包みの袋を開けて、頭の細いほうからかじりつき、飲み込んでから

「美味しい！」

今日一番の満面の笑み、

駄目だ…もう思い残す事はないぜ……

チエーニ・スキア、リュミエールの笑顔にやられて立ちながら逝く。

ちなみに、機能停止時間は、リュミエールが不審に思ってチエーニを揺るまで続いた。

面倒な奴（後書き）

次回は戦闘回です。

晩酌（前書き）

戦闘回と書きましたが、チエー二の昔話を多くする為に、後回しにして、今は主要キャラを全員登場させます。
女性が多めですが、後に男性も追加します。

晩酌

2300hrs

イルミナル邸

深夜になり、周りの木々は少し強い風でざわめく。

お嬢様は最初はまた生徒会のお仕事をするつもりでしたが、遂に力尽きさつき就寝しました。

お嬢様の寝顔もいいです。ええ。

しかし留意する事項が二つ。

一つは朝に感じた敵の残り2人からの襲撃は無かったこと。

気配からして一人はかなりの手練れ、逃げたとは考えられず、日を改めてくるかもしれない。

警戒は必要だな…。

そしてもう一つはあの副会長。

とりあえず次ふざけた真似したら潰す。

さて、私でもお嬢様の愛しさよりは足下に及びませんが楽しみはあります。

え？意外？心外な。

食堂の隣、料理部屋にある机に酒と菓子類が用意されている。

「よっ、来たな」

少し赤が混じった金髪で姉御肌的なサバサバした妙齡の女性が片手を上げて待っている。

「待たせました、ルノーさん」

彼女はメイドのユウの直属上司で侍従長のルノー・ハイネさんである。

私が来た三年前から既に侍従長で、私に執事の作法を叩き込んでく

れた恩師であるので敬意を持つて、さん付けをしている。

本来なら当主あたりに付いていくが、家の留守を預かりたいと志願して、ここに居て我らの姐さんにもなってもらっている。

ちなみにシェフは近くの村から来てるので既に帰り、運転手のフェンは酒が飲めないからいつもこの晩酌の時は愛銃持って屋上で警戒してくれる。彼も元王国軍で戦闘員としても優秀である。代わりにお嬢様が学院の休みの日は私が警戒します。

「気にしてないさ、ウイスキー行く？」

「ハーフで」

「あいよ」

彼女は慣れた手つきで氷を入れて1：1で作る。

「心行くまで飲め！」

「あざっす、でもその前に」

「そうだな、忘れかけてた」

笑いながら彼女はストレートにして、互いにグラスを持ち

「「お疲れ様です」」

チン、と音を響かせてから飲む。

やはり瓶でも、未調整のタイプで、アルコール度数60だから水で割っても強い。しかし

「ふう…うまい」

「ストレートで良く半分飲めますね…」

グラスにあった分がかなり無くなっている。

「まあ、このくらいのお酒から私をピリツとさせてくれるのよね、ビールや果実酒、調整されたウイスキーは刺激が足りないのよ」

「そうですか」

彼女の酒に対する強さに驚き通り越して凄いの感想しかない。

「そういえば…今日は目標を一人始末したと聞いたけど？」

ナッツを食べながら彼女が聞いてくる。

この人は私の前歴が暗殺者と知り、気軽にそういう話が出る少な

い人の一人だ

私もナッツを貰いながら

「三人組の恐らくは一番下手な奴ですね。光学迷彩みたいな高級品を持ちながら、メリットデメリットを理解してませんでしたし。多分捨て駒の様子見。一番の手練れ、恐らくはリーダーは結構やりますね。あとはどの位のレベルかが気になり、いつ来るか…」

「誘っておいでなんだけど、今お酒飲んで大丈夫」

「ホント今更ですね」

私は思わず苦笑してから

「大丈夫です。この程度なら酒に強い自分にとってはむしろ高揚効果ありますし、照準はブレません。それに、基本的にこの時間帯で奇襲するのは余程の自信が無ければ出来ません」

「へえ、どこの教訓」

「自分が暗殺者ならと考えてです」

もしこの執事をクビになり、また暗殺者に落ちた時に、お嬢様を暗殺しろなんて言われたらそのクライアントを殺しますけどね。とりあえず灰も残しません。

彼女はクスクス笑ってから

「あなたがリユミエール様を暗殺なんて、失敗すると思えない。例え初対面でも取り込まれそう」

「同感です」

私も笑ってウイスキーを口に含む。

そのとき、はたと気づく

「ふむ、そういえばユウを見かけないな…」

「ん？ああ、あの子ならフェンの所にココア持ってたかせたのよ」

へえ、確かにフェンは甘党だし、ユウはココアや紅茶などを淹れる技術だけは一級品だからな

「でも遅いな、あいつなら無事故達成宣言する為にわざわざ戻ってくる奴なのに」

「そんな宣言よりも、彼の近くに居たいんでしょ」

「?、どういうことだ?」

「鈍いね、あの2人はまだ告白してないけど、普通に恋人同士だよ」

「!」

驚きで固まった。本当に気づいてなかったんだねと、彼女は微笑しながら

「私もつい最近見つけたけど、朝の食堂のテーブルセティングや、他にもあなたが学院で行動してる時なんか結構イチャイチャしてるわよ。だからさっきフェンにココア持って行き言ったら、ちゃっかり2人分持つて行ってるのよ」

私は意外なものを感じた。あのしつかりのフェンと食器の破壊神ユウがかゝ互いに真逆に惹かれたのか?

「まっ、こういう初々しい話は私結構好きだから、応援するけどね」

「本当に好きなんですね…」

目が輝いていますよ…。

「あなたも少しはリユミエール様以外にも興味示したら?」

「だが断る」

「即答ね」

お嬢様以外を愛でると?何を言うんだ。それよりも、

「ルノーさんこそ、そろそろ彼氏でも…」

「……ふふっ、チエー二君?」

あつ、地雷踏んでしまった?いやわざとだけど

ウィスキーを最後は一気してから

「では、ご馳走様でした」

「あ!こら!」

私は部屋から緊急待避さ!

さて、良い話聞いた事だし、あとでフェンをからかおうかな。少しイタズラめいた笑みを浮かべながら私は廊下を歩く。

ルノー視点

チエーニが足早に去ったあと、私は最後の一口を飲みきり、刺激と風味を楽しんだあと

「お嬢様の話し相手になり、出来の悪くても可愛くて仕方ない部下を見て、その子とまじめ君の恋愛模様が見れて、そしてあんたと晩酌が楽しめれば十分幸せなのよ、チエーニ」
今は居ない奴に向けてそう呟いた。

執事の長い夜 起動（前書き）

誤字指摘がありましたので、一度削除しました。

携帯投稿の場合、どうすれば誤字の部分だけ直せるのでしょうか？

次回はチェーニが人外になり、残酷描写がたくさんですがご了承お願い申し上げます。

その次は甘くなります！なりたい！

執事の長い夜 起動

0230hrs

某所

もはやここに来る事は無かったと思っていた。

3年前、私設兵士共にやられかけたこの場所。周囲はスラムで、その真ん中にある旧倉庫街。

ご丁寧に電灯が新しくなっている。

ルノーさんと別れたあと、私の部屋の窓に見覚えあるフクロウが居た。

暗殺依頼を受けるギルドから放たれる緊急用フクロウ。

くちばしには手紙をくわえている。

内容はここに来い…と、

誘い込んだ事はいくつもあるが誘われるのは初めてだ。

一応水を2リットル飲んで薄め、愛銃を持ち、手榴弾も携行して、侍従用の車でここまで来た。

「来てやったぞ！」

P550を肩にかけ、指定された場所に着く。

そして、目の前の倉庫街十字路の陰から

「良かったですねえ…」

「お久しぶりです先輩。お元気でしたか？」

目の前に居る細身の男、ギルドでも特Aランクの仕事をしていた、

「透明人間」カール・セイズ。裏では大陸十指の第三位で特に隠密と超長距離狙撃のスペシャリストであり、ギルドと契約している私が所属していた暗殺組織の先輩。彼は微笑して

「ええ、まあ今もぼちぼちやってますよ、ねえ殺戮機械」

「そんな名前は捨てたさ」

忌々しいあだ名、昔を思い出す、いや、暗殺組織に入る以前の記憶は無いが…

彼は続ける

「裏ギルドでは「殺戮機械」と呼ばれる大陸十指の元第八位の戦闘力、隠密姓、無駄の無い思考での一対多数の殲滅力…民間人を巻き込まないという非情じゃない思考で任務を長引かせた失点はあつても、特Aランク任務成功者の肩書きでどこかの裏組織や傭兵に居ると思いましたがよ、まさか日の下で最も輝くイルミナル家の狗とは」「狗とは酷いですね、一応執事という肩書きはあります」

お嬢様の狗…ならいいかな。しかし

「先輩が私の敬愛すべきリユミエールお嬢様を狙っているのですか？」

彼はうーんと呟いてから

「本当は反魔術過激派からCランクでギルドに依頼は来てましたが、しかし別の過激派がBランクの奴でもあつけなく死んだと聞いてね。見に行けば君が戦っている。最初は何の冗談かと思つたけど調べたらね…」

「なるほど…」

だから一人だけ気配の遮断の調整が出来ると思つたら、大物すぎだ…。

これは私の命は正直やばいな…今の状態で戦闘力なら私に分があるが、一度見失えば彼の技で五感を狂わされ透明人間に感じ、気づいたら後ろから首を掻かれる、互角じゃない…でもその前に…

「見物人は要らない」

素早く懷から抜いたP220が倉庫の屋上に向けて弾を放つ。

「がつ！」

何もない空間から血を吹いた男が現れ、ぐったりする。

「さすがだな、彼らは光学迷彩を使用した兄弟で、2ヶ月後にはBランクに上げる予定の奴らだったのに」

「じゃあ随分ギルドもレベル基準を緩和したんだな、こんなのがBとは」

「同感だが仕方ないんだな」

「どういうことだ？」

その話に疑問を感じる。3年前まではもつと精強な奴らがBやCに居た。

今の奴らはせいぜいCクラス…。

その時、カールはニヤリとして

「それは、この状況を切り抜けたら教えましょう」

「はっ……!!」

聞き覚えのある幾重のブーツ音が、しかも多い…。

見回れば、銃器を持った奴らが下卑た笑いを見せて屋上や後ろに居て、前方にも気配を感じる。

「3年前と一緒に何をしたいんだ？」

「ふふ、君が3年前、ここで戦った兵士達と同じ状況が見たくてね、あと、君は任務失敗の挙げ句雲隠れした罪で見つけて仕留めたグループには2億レリル、そして階級昇格が約束されているんだ」

「笑えねえ…」

まさかここまで高額賞金首になってたとは…

しかも数は気配も含めきつちり40人、3年前とびつたり、さらには電灯を新しくしてあり、深夜なのにちゃんと相手が見える

「あとは当時みたく雨が降れば完璧だが…それは叶わないみたいだ」

「しっかりと計算しやがって…準備が良すぎます」

「褒めて頂き光荣」

「褒めてません」

「まっ、それはともかく」

スルーか…と少し怒りを感じた時

「君がここにくたばったり、殲滅出来ない腑抜けになってたら、君の愛しい人も含めて全員殺しちゃうぞ、あのお嬢さん斬りつけるなら、さぞ良い声で鳴いてくれそうだ」

言つとペロリと上唇を舐める。そしてゾツとする私。

この行動を取るのは彼の本気の意味。

「貴様……」

「おゝ、少しは昔の感じになったね、その調子だ。それでここを切り抜ける。そしたら今の裏の世界の話しと、君の人たちは傷つけないさ」

「…本当だな？」

「ああ、では高みの見物と行こうかな。アディオス！」

笑いながら、奥に消えていく。まあどっからか高みの見物をするのは間違いないが今は関係ない。

お嬢様、そして皆を守るため…

「お前ら…運が無かったな…」

静かに呟くように言うと、周りからは余裕の笑いが聞こえる。今から絶望の悲鳴の旋律に変わる事も知らず…。

「悪いが俺はどうしても手加減が出来そうにない…大人しく…死ね」
昔の俺口調に戻り、声も冷え切った刃のような声色になる。
目を瞑り…そしてゆっくり開くと

「…！！！！！！」

敵達に戦慄が走り、まわりに殺気という絶対零度が流れる。
茶色の瞳は瞳孔が開いたように透いて、一つしか考えない。
人をいかに殺すか…3年ぶりの「殺戮機械」の正式起動である。

「せ…制圧射撃だ！屋上の奴ら撃てえ！！」

「ウオオオ！！！！」

リ―ダー格が叫び周りは振り払うように叫びながら

「……………」

さて…始めよう…

血で血を洗う凄惨な地獄にようこそ…。

執事の長い夜 殺戮（前書き）

チエーニは殺戮中は何も考えず、体が動くので、代わりにカール視点で実況します。

チエーニが人外になりますので注意。

執事の長い夜 殺戮

6 / 15

0245hrs

カール視点

「ふふ、やはり君は逸材ですよ…」

呟きながら目の前に広がる楽しい光景を眺める。

倉庫に挟まれた細い路地に20人近いギルドの奴らが両方の倉庫の屋上から密度と範囲のある制圧射撃が行われる。

しかしチェーニは動揺なんて微塵にも感じさせず華麗に避ける。

避けるというより、敵の銃口の動きを目と勘で全て判断して、弾が来ない地点に素早く移動していると言った方がいい。

更に彼はP220で的確に右側倉庫上の敵の眉間を撃ち抜く。

おいおい、もう恐怖に怯えている。情けねえ…

「ん？」

制圧射撃が不可能と悟ったか、まだ損耗していない左側が逃げ始めて…許さないようだな。

チェーニはスーツの内側から、暴徒鎮圧用のゴム弾銃、そして破片が詰まった大きめの手榴弾。

ピンを抜いた手榴弾を空に向かい投げる。

これじゃどこにも当たらず落ちてくるが、と、思ったら。素早く移動して角度を変えてゴム弾を放つ。

これで手榴弾は逃げた目標集団の前に落ち…

ドンっ！と大きい破裂音と同時に、中に詰まっていた破片が集団を襲い、切り裂き、体内にめり込み全員戦闘不能にする。呻く者もやがて死ぬだろう。

もう片方は殺傷より風圧のある小さめの手榴弾を使う。

吹き飛んだ内数人は倉庫上から下に落ちて全身骨折やら何やら大変な事になっているだろう。

「ふむ、しかしなぜ手榴弾を変えたか…」
合理的な思考になる彼にしてはいささかおかしいと思った時、答えが分かった。

「撃て撃て撃てえ!!」

既に発狂寸前のチエー二包囲組が小銃を撃ちまくる。

上からと違い火線が水平な分穴が少ない。

しかし…

「!!!!」

「あああ…」

屍になった人間を担ぎ盾にする。

防弾チョッキ類を持たない彼が考えた防御方法、人間を敬わず、屍を遠慮なく道具にする。

素晴らしい…。

射撃を止めると、今度はナイフを持った2人が一気に近接格闘を始める。

射撃不能だから近接に変えても無駄だ。

冷静に捌いて、1人のナイフを持つ腕を止めて、裾から出した細いナイフで首を掻き、もう1人はカウンターで喉に突き刺し、呻く前に絶命する。

そしてチエー二の背後、人が居ない方の十字路の物陰から好機と考えた4人伏兵が飛び出すが、構える前に、さっき殺した奴のナイフ二本と、自前を懐から二本を投げると、見事に目標の腕に刺さり、銃がぶれた瞬間、いつの間にか弾倉変えてたP220で全員撃ち抜く。

既に半数以上の人間が既に死ぬか、絶望の呻きを上げて死んでいく。生き残りが恐怖で動きが止まっている時に、P550の肩掛けベルトを足に引っかけ持ち上げて、さっきまで威勢良く撃っていた集団

に向けて構えてフルオートセクターで全弾横一閃に射撃する。

「うわあああ！」

「逃げろ！逃げろ！」

「ごめんなさい！ごめんなさい！」

「化け物だあ！！」

恐怖で全員が逃げ出す。

しかしそれを許すわけがない。

撃ち尽くしたら3秒で弾倉を交換して追いかける。

あとは弱いものいじめの究極、殺戮するだけだった…。

0310hrs

チエー二視点

仕事を終えると、さっきの場所まで戻る。目は普通に帰り、周りの惨状を見る。

「久しぶりだな…」

特に悲しみも罪悪感もなく、集団殺戮の感触を懐かしむだけであった。

その時に拍手が

「良く出来ました。中々楽しめたよ」

晴れやかな笑顔を浮かべるカール。

「約束は果たした。お嬢様には手を出さないだろうな？」

返答次第では良くて相打ち、悪くとも戦線復帰不可能にする。

後は優秀なフェンと私の心当たりある将来有望な奴にお嬢様を任せ
る。

「ああ、もちろんさ。但し、君は殺さないといけないから、時々顔
出すかもな」

「おい…」

顔が引きつるのが分かる。

お嬢様の為ならいくらでもやるが私闘でこいつと戦うなんてまっぴ
らごめんだ。

「2億レリルを目の前にして殺さないなんてもつたいないだろ？まあ今回は武器も尽きて、疲労が溜まっている君と戦ってもつまらないし、もう一つの約束が果たせないから止めとくさ」

「約束？ああ、ギルドの事か…」

ギルドの兵隊は明らかに弱体化していた。

証拠に昔なら、怪我の一つは負っていたのに、今回は返り血はひどいが怪我は全くしていない。

「まあ話すと長いが、簡単に言っていると傭兵協会と全面戦争して大敗北した」

「！！、傭兵協会が？」

この大陸は、魔術と国際発言で国力が決まるまだ平和な伝統主義陣営のような地域もあれば、魔術を退廃として科学至上主義で平和維持活動の名の下に軍時併合及び戦争を繰り返す先進主義陣営、技術格差の大きさから軍拡と戦争繰り返し返す軍事主義陣営と、大から小まで多くの陣営が居る。

そんな戦争多い地域に必ず居るのが傭兵である。

金を払えば煩わしい兵士教育をしなくても技術的に高い兵士が来るからだ。

その個人傭兵の管理や同じ戦域に複数の傭兵団が集まって、いつの間にかそいつら同士が争わないよう監視と仲裁して、ランク付けして、虐殺や集団強姦などの戦犯や組織的に傭兵の名を落とす者達への制裁を加える目的で結成されたのが大陸中央の超大国、ティガ連邦に本部置く傭兵協会である。

傭兵協会の権威は凄まじく、協会未加入の傭兵は基本的に採用されない。

対して、暗殺や諜報、虚言の流布、更には国や自治体にとっては問題な資料を消したり、テロをしたり、別の意味で戦場を暗躍し、大陸全土に支部がありギルドである。

これも高い権力があり、ランクは特A～Eまでで、このランクを持

たない人、また自分のランクより上の任務には絶対に参加させない。しかも規約を守り任務遂行するならどんな組織も、極端な話国際指名手配犯もギルドに加入してランクの任務を出来る。更に支部があるので簡単に任務が受けれて、高額報酬も受け取れる。なのでほとんどの暗殺組織や殺し屋、他諸々がギルドに集っている。以上の二つが、この大陸の二大裏世界組織で、表にもある程度黙認されている。

しかし傭兵協会とは表の戦場と裏の戦場であるギルドとは混じりがなく、基本的友好なのに……。

「3年前、君が行方不明直後、ギルドの一部の馬鹿共が、傭兵協会を襲撃、協会長含む数人が不意を衝かれて抵抗出来ず死んだ」

「……？、規約違反では？」

ギルド規約第8条には傭兵協会に喧嘩売る任務は受けるな、実行するなとあった筈だ。

「その通り、大方、傭兵協会で傭兵のマナーが飛躍的に良くなり、正規軍の高級将校が鬱陶しさを感じて依頼して、報酬の高さに目が眩んだ奴らが軽いノリでやったと思うが、後が凄かった、想像出来るだろ？」

「ああ、はつきり分かる」

傭兵協会のトップ陣は、知らなければ鉄拳ものの彼らにとっては崇拜すべき者たちである。その者たちが殺される、しかも信頼してたギルドに……カールは続ける。

「協会は即時に戦闘許可、集団戦法の傭兵は素早く各支部の連絡を遮断、的確に襲撃して壊滅させた。個人主義のギルドは逃亡したりして、結果、戦争集結後には戦力の大幅ダウンをしていたのさ。だから戦力拡充のためにとランク昇格がしやすくなり、こんな体たらくなのさ。もう昔に戻る可能性は低いな」

「そうだったのか……」

愛着はないが、元の所がそんな事になってたとは。

「で、君に一つ見せたいものが」

「？、なにを…」

言い掛けて言葉が止まる。目の前に居たカールが消えたのだ、そして私の首にナイフを突きつけている。

「先輩…」

「ふふ、驚きましたか？私、魔術使えるようになったのですよ。まあ方法は内緒ですが」

笑っているがこちらは笑えない。こいつ約束破る気か？更に続ける「チエー二、一応聞くが、ギルドと組織に戻るつもりはないか？今なら戦力回復と喜んで、罪は消えるが…」

「……くくつ、愚問ですよ先輩」

殺されてもいいから是非言わせて貰おう。

「私の生命は3年前から1人の女性に捧げると決めました。何があるうと私は裏切り、他の組織に入るなんて、有り得ない。絶対に」はつきり言う。そうすると、カールは笑いながらナイフをしまい。「OK OK、それでいいんだ。いやゝ安心したよ。もしこれで組織に戻るとか言い出したら殺して換金するところだった」

「だったらそんな提案しないで下さい」

本当にこの人の考える事は分からない。

「でもな・・・本当にあの家でまた働けるかな？その愛しのお嬢様に嘘付いて、過去を隠して」

「？、どういうことだ？」

「くくつ、まっ、今回はここで開きということ、今度会うときは覚悟しろよ？」

「出来れば未来永劫無い事を願います」

カールはそのまま立ち去り、やっと静かになる。

「早く戻らなければお嬢様に見つかる」

お嬢様を心配させるのは言語道断、幸い怪我はしてないので、早く血を洗い流していつも通りにお嬢様の起き抜け顔を見る。癒やしを求めて全力で家路につく私であった。

ちなみに遺体はどうする？警察に任せましょう。

銃は生産直後に登録から外れた裏の品なので、捜査しても、どの銃が使用されたなんて分かりません。なので証拠0ですがなにか？

何があってもどんな時も（前書き）

難産である上に出来が…申し訳ありません！

何があってもどんな時も

6 / 15

0430hrs

リュミエール私室

リュミエール視点

コンコンコン…コンコンコン…

何かが叩かれる音で私はうつすら目を開ける。

こんな夜に誰かな？

起き上がり周りを見ると

「フクロウ？」

フクロウが必死に窓を叩いている。更にくちばしには封筒らしきものが…窓を開けると、手紙を床に落としそのまま飛びさる。

「？」

封筒を拾い上げると、差出人は…ない。

魔力痕や爆発物の形跡も無い。

恐る恐る封を開けると便せんが一枚、それを読むと

「これは？」

私は内容を目を通して、

「!!!!!!」

静かに震えた。

0900hrs

フェルザーノ王立学院中央塔屋上

「ねえ、あなた随分と疲れているけどどうしたの？」

いつもなら扇情や変に誘う言葉ばかり使うセネルが珍しく心配する。

「徹夜明けですから…」

床にシートを敷き、そこに座り、壁にもたれて生あくびしながら私

は答える。

殺戮してから、大急ぎで邸宅に戻ると、体に付いた返り血と硝煙を洗い流し、せっかく支給して下さったスーツはもったいないですが捨てて、銃の解体清掃したら既にお嬢様の起床手前でしたので、準備などで寝ていません。

いつもなら3日間くらい寝なくても大丈夫ですが、久しぶりの殺戮機械モードで負担が大きかったみたいです…。

しかも嫌な事は、完全フラフラの私にお嬢様に心配かけさせてしまうということ。

そういえばそれ以外にも何か感じたが…どうしたのだろうか？

「ふん、まあ何があったか聞かないけどご愁傷様」

「心読めるからか？」

「そんな事しなくてもどうせリユミエールのためでしょ？読まなくても分かるわ」

私の顔が思わず引きつる

彼女はやれやれと言った表情のあと

「どこまで尽くしてどこまで大切なよ、そして報われてるの？」

「報われてるさ…3年前から」

正確にはあと1ヶ月くらいで3年になるが、この日々は私にとっては素晴らしい日々と断言出来るからな。

「まっ、人の至福はそれぞれね…」

「どういう意味だ？」

「何でしょう？」

いつも通りに妖艶な笑みを浮かべる彼女に私はため息吐いてから、ふと思ひ出す。

「そうだ、セネルに聞きたい事があるんだ」

魔術に精通してる彼女に聞きたい事

「なに？3サイズ？」

「抜け、魔術についてだ。案外興味深いと思う」

「へえ…どんな事？」

彼女が食いつく

「瞬間移動出来る魔術はあるか？」

「魔法陣は？」

「見当たらなかった」

「じゃあ時属性の「タイム」と「アクセル」を組み合わせれば、時間停止中に早いスピードを出せるから瞬間移動は一応可能ね、体の負担は重いけど」

あつという間に答えをはじき出す、凄いな…

「じゃあ、魔術師でなかった人間が魔術師になるのは」

「有り得ないわね」

即答か…

「何か魔術の力を蓄積するものとかもか？」

彼女は少し考えて

「無いわね、あつたらとつくに軍事転用されて超火力の兵器が出来るわ」

「そりゃそうだな…じゃあ…」

「でも…その人間が優性因子持ちなら可能かも」

「優性因子？」

私が聞き返すと、セネルは説明を始める。

「私みたいな一般で親が魔術師で無いのに魔術師の力を持った人間はどうして生まれるか知ってる？」

「さあ、そんな知識は持っていない、何かの特異か？」

「まあ違つてない。魔術師には強力な特有遺伝子を持っているの。」

これを仮にA Bとする。で、実は一般の人の中にはAがBかの欠落因子を持つ人が何人か1人の割合で居て、その内、AとBの因子を持つ男女が交配して生まれる子がA Bの覚醒因子、つまり魔術師になるの」

「シンプルだな…」

「でも、AもBもA α とかまた細かく分かれていて、A Bになっても魔術師になれない因子、それが優性因子」

「ふむ、つまりは魔術師になれなかった魔術師ということか？」

「そんなところね」

彼女の説明を聞いて私は納得と疑問も起きる。

「しかし、優性因子だけだと魔術師じゃないんだろ？」

「確かあったの、優性因子を覚醒させる研究が…まあ魔術師脅威論で伝統主義陣営以外から非難されて中止になったとか…この話が本当なら秘密裏にその研究が再開されたと」

「ふむ…何だか面倒な感じになってきたな…そして頭痛い…」

「いい加減休みなさいよ…」

完全に呆れました。

しかしそんな言葉に負けないで！

「だが断る、私は任務を全うするためにな…気遣いはありがたく頂く。あと、さっきの質問の答えをくれてありがとうな」

私にしては珍しく、他人にお嬢様用の笑顔を向ける。

彼女は

「はいはい、頑張れ頑張れ」

棒読みで見送った。

しかし若干頬を赤く染めて照れ隠しにも見えるが、チエー二は全く気づいていなかった…。

後はいつも通りの見回りと魔術の歴史と公開されている研究書を、500万冊の本と2千万の資料を保管する学院図書館から借りて軽く目を通して、優性因子の法則は理解したが、優性を覚醒因子にする研究書の方は禁書とされて拒否された。

そして

2100hrs

チエー二私室

この家は使用人に対して待遇が良く、基本的に小さいながら一人部屋を用意してくれています。

ちなみに自分はタンスとスーツをかける場所とベッドを一つ、そして机もあります。

銃は全部別の部屋に隠してあります。

今頃なら私は何かしら仕事をしていますが、お嬢様の命令で早く寝るよう言われてしまい一応寝間着になりましたが…

「ふむう…」

眠れないのだ。

体は眠りたいのに頭は変にフル回転で眠れない。

今日得た情報でカールが優性因子を覚醒因子に変えたと仮定して、最強を最凶にしてくれた人は誰か？

という大きい事から

メイドのユウがドジをしないか？

という小さい事も考えれば

お嬢様を部屋までエスコートや楽しく話す時間が無い！

という客観的には、おいおい、私にとっては由々しき事態の事を考えたり…

しかし、せっかくここまでゆったり出来る時間も頂けましたし、大人しく目を瞑り、ユウが言っていた羊数えでもしようかな…

とにかく何かしようかと思った刹那

コンコン…

ドアをノックする音、誰でしょうか？

「はいはい」

たいていはフェンがお嬢様に関しての相談か、ユウが伝説の食器数枚同時割りやらかしたか！

しかし全く予想の斜め上

「まだ起きていたのですか？」

「え…はい？」

目の前にはリユミエールお嬢様…

な…なんで私の部屋の前に居るのですか？！

「ま、まだ起きてましたが…なにかありましたか？」

「何も無いけど、ただちゃんと寝たかな？と思って」

なんと…私のために…

私の胸の中は感動で一杯ですよ。なに、大げさ？主人に喜んで仕える人になれば分かる気持ちです。

「眠れないのですか？」

「ええ…まだ何かしらやっている時間だから、頭が変に冴えて…」
本当に、お嬢様から貰った時間が…

「あの…少しお話しませんか」

「?!、是非とも！」

嬉しくて少し語尾が上がったのは許してほしい、しかし次の瞬間

「じゃあ、お邪魔します」

「は？ここですか？」

「駄目…ですか？」

「いえいえいえ」

私がそう言うとお嬢様は嬉しそうにほえむ。

そんな顔されたら反論なんて出来ません！てかお嬢様の決定至上主義なので元々から反対なんて選択肢はありませんが！

「しかし座る所が…」

「ここで話せばいいですよね」

と、彼女はそのまま私のベッドの上に座る。こんな男性臭い所にお嬢様が座るとは…恐れ多さを感じながら、お嬢様の横に立とうとしたら

「あなたこそ座りなさい」

いきなり私の腕を掴んだと思ったら強制的に横に座らされて
「よし！」

お嬢様の悪戯めいた笑みに腕に感じた柔らかい手の感触、お風呂上がりか、頬が少し紅潮して髪が少し濡れていてそこからの優しい匂いが鼻孔をくすぐり、お嬢様の白いパジャマが更に神々しさを増し、とどめは近距離の上目使い

お嬢様は私に死ねと言っているのか?!
だが

「昨日はどこに行っていたのですか?」

お嬢様の言葉に悶えてた私から一気に冷静になる。

「……………」

「答えられませんか?」

「申し訳ありません」

何があっても言えないさ。お嬢様は

「責めるつもりもありませんし、チエー二さんの行動には信頼して
いますが、心配ですからあまり居なくならないで下さいね?」

お嬢様の気遣いと私を頼りにしてくれるお言葉、身に沁みて更に嬉しさがこみ上げます。

「私はどんな事があろうともこの身ある限りお嬢様の側に居ます」

「ふふつ、ありがと……チエー二さん、これからはあなたの部屋に遊びに行ってもいい?」

「え…あ、どうぞ、仕事に都合がつけばですが、今度はお嬢様が好きな紅茶用意します」

チエー二はこんな天国がまた来たら死ぬと本気で思いながら了承する。

2人で笑い合った後

「では、私も色々あるので、そろそろ失礼しますね」

「ああ、部屋までお送り…」

「シユル―ファイル」

お嬢様が笑顔で唱えると、立ち上がるうとしていた私の体がベッドに勝手に横たわり、力が抜けてしまう。

お嬢様は薄い布団を私にかけると、額に手を置き、慈母の声で

「ゆつくりお休みなさい…」
まさかの強制シャットダウンですか…
意識はやがて沈んで真っ暗になる。

リユミエール視点

睡眠魔術でチェーニが寝てから20分、私は彼の寝顔を見て顔が自然に緩み、心臓はいつもより早く高鳴る。
そしてパジャマのポケットに入れてあった手紙を見る。
早朝にフクロウから渡された手紙、中には一枚の写真と手紙。
手紙にはいつかあなたの執事の命を奪いましょう。と、彼の過去です。

そして写真にはその過去、まだ顔立ちが大人になったばかりに見えて、特殊な軍事迷彩に身を包み、カメラから明らかに目をそむけている男性。

そう、チェーニである。

その冷たい瞳は今の彼とは全く違う、3年前そのものである。
彼に何の過去があったのかは分からない。

だけど

「私はあなたと同じく、どんな時も信じて守りますよ…」
何があっても絶対に、あなたの主人にして

「お休み、愛しい人」

微笑しながら既に落ちきった彼の頬に優しく口づけた…。

車内にて（前書き）

キリがいいので投稿

次は新キャラと軽い戦闘回

ちなみに現代なのに携帯の類が無いのは、リュミエールはデジタルは電卓以上は苦手設定。

これから先進通信機も出る予定。

車内にて

6 / 16

0745hrs

お嬢様を学院に送るために走る車、その車内で私は左頬をふれていた。

昨夜のお嬢様との会話&不意打ちの睡眠魔術で全快になった私は絶好調であるが…

「まだ気になっっているんですか？」

「まあな…」

フエンが前を見ながら聞く。

朝に起きた時から何だか左頬が熱いようなむず痒いような…でも不思議と嫌なものではなく、むしろ気持ちよいものである。

更に言えば、この原因が分からないのがとても残念に感じるのは何故だろう？

まあこの感覚は置いておくとして

後ろに居るお嬢様は朝から仕事モードで何かをノートに書き、電卓を叩いている。

お嬢様が息を吐き、計算を止めたのを見計らい

「また何やら忙しいのですか？」

「ええ、昨日理事会がいきなり華の夜会を一年前倒し開催する事を決定して…二週間後の夜、フェルラ副会長の誕生日に併せて」

「それはそれは…」

私はお嬢様の忙しさに心から同情すると同時に疑問も浮かぶ。

「何故前倒しを？」

「来年は魔術師サニスの500周忌だから」

「ああ…」

華の夜会

この学院には各国の王族が入学する。

特にシルバニアの国王子息が12年生、20歳の誕生日を迎えると、この華の夜会が開催されて、本格的に始まる政治への参加を祝福して、同時にこの学院の中から正室を子息自らが決定するのである。

この300年間はこの伝統に則り現国王も先代国王もその前も夜会で決めた学院の級友を選び、恋愛の末に結婚している。

大抵は学院仲の良い女性を選ぶのが多く、簡単に予想がつき、選ばれないと分かる貴族女性は夜会で高位貴族男性に色目を使い、男性は好きな人に近づき、早めにマークする。

ちなみにこのような夜会で、貴族男性は自分より階級の低い貴族女性に、結婚を申し込むと女性に拒否権が無い。

拒否すれば、どんな風評被害が自分の家に来るか分からないからだ。だから下心を感じたり、好きでもないのに結婚して仮面夫婦も何組か完成する為、男尊女卑のこの夜会の悪習を直そう！と叫ぶ者達も居るが、伝統という名の下その声はかき消されている。

まあ仮面夫婦になる女性には同情しますが、私にはそれ以上関係ないので改正されようがされまいが興味ありません。

そしてさつき出た魔術師サニスとは、この王国建国に尽力し、現海した神話の魔物を封印して死んだ英雄として、この国では彼の死後100年ごとに喪に服し、大きな行事を自粛する傾向にある。

学院副会長でありシルバニア国王一子にして王位継承第三位のフェルラが主役のこの夜会がいかに重大かもここで分かる。

まあすぐに国王に頼る甘ちゃんなのは心の奥にしまおう。

「正室の候補は恐らくハルネス先輩ね」

「ハルネス様ですか」

お嬢様の出した名前にすぐに思いつく。

フェルラと同学年で、お嬢様と同じくらいの優秀さと、表のお淑やかと裏の貴族の悪の部分を上手く使い分けて、階級も公爵と申し分ない、ミッドウェー公爵家が一子、ハルネス・ミッドウェー様である。

彼女の両親は父親シルバニア王国陸軍元帥にして最高司令官。

母親は王国空軍戦略司令部司令官。

長男は魔術師だが武術の道を選び、陸軍師団長

次男は王室警護官という精鋭

という完全なる軍人一家で、覚醒因子で長女ハルネス様だけこの学院に来ました。

彼女と副会長は仲の良い噂も聞きますし、伝統主義陣営の中で最大勢力で軍事大国と称されるレベルの王国軍の手綱が取りやすくなる利点が大きい。

大陸の魔術師を事実上まとめる魔導院の長は決定的と言われ、結婚すれば裏から王国の意のままに魔導院と魔術師が操れる可能性があるお嬢様と結婚するのも利点がありますが、お嬢様だと、お淑やかでなく積極かつ高潔で正論で思惑が撃破される可能性もありますし、イルミナルの跡継ぎの為に王族が還俗して婿にならないといけないのでメリットが無い。

まあもし求婚してきたら少しお話ししないといけませんね。事故に見せかけて…

階級を考える？そんなの関係ありませんよ私には。

まあお嬢様也多感な時期で跡継ぎも必要、もし夜会でもこれからでもお嬢様が相思相愛する相手が出来て居るなら見守りましょう。

しかしその相手が裏切ればその家の将来はありませんよ。
ヤンデレ？何ですそれ？

そうだ…

「今日、執事演習があるので、それと前に出した案は…」

「新しい人を採用したいのですよね、チェー二さんの推薦なら問題ないですし」

笑顔で許可くれる。ありがたき幸せ。

今日は執事達の全員参加の訓練日、そして私は一番少数の戦闘執事の訓練。まあ私の無双ですが。

その中で、トラブルでクビになった若い従僕が素晴らしいほど身体能力があつたので、弟子にして、費用は学院からの取り締まり謝礼報酬を全て回し、私の技術の全てを叩き込んだ傑作。

後で皆様に紹介しますよ。「作者メタ発言させるな」
そして車は学院に間もなく着く。

師匠と弟子（前書き）

格闘戦があります

師匠と弟子

6 / 16

0900hrs

フェルザーノ王立学院執事錬成場

私は非常に面倒だが、学院に居れるため、学院お嬢様を観察するため「これ重要」に執事錬成場に向かう。

既に多数の貴族の執事が集まっているが、お世話や主人の出掛けに随行する執事集団でなく、銃やナイフ、仕込み武器を整備している、戦闘執事の集団に向かう。

何故戦闘執事が必要か、それは魔術師が無力な存在が多いからだ。

攻撃魔術が出来る者も学院や邸宅から一步出れば、特異能力保持の危険人物として魔術行使が禁止される。

戦争では全面解禁、他例外は事故現場に居合わせた場合、治癒と鎮痛などの回復魔術は許可されるが、攻撃魔術は、絶対的正当防衛又は緊急避難で、なおかつ単体の気絶程度のショック魔術と限定する…とされている。

これは国際条約クラスの決めごとで、広範囲魔術の乱発や精度を高め周りに迷惑をかけない、そして最悪な魔術暴走による大量破壊を防ぐのが目的だが、いざ有事になればそんな決めごとなんか守れないのが実情で、攻撃魔術は戦争以外では使いにくい代物である。

またお嬢様みたいな高位で過激派の最重要ターゲットで攻撃魔術の使えない人も居る。

そんな貴族魔術師を守る役目を果たすのが、その名も戦闘執事。

主人の為に命をかけ、人的被害を出したら警察でも何でも喜んでその身を差し出す、忠君にして精強、そして軽くMな集団なのである。

ちなみに初めてこの集団の訓練に参加した時に、舐められてけなし

てきたので、軽く… 本当にかかる——く血祭りにしたら、以後私の側に一人を除いて寄りつかなくなりました。

「師匠！」

1人のまだ顔立ち若い茶髪で碧眼の青年が走ってくる。

ふむ…

「おう、久しぶりい！！」

「うわっち！」

私は左足軸に強烈な上段蹴りをかます。青年は左腕で受け止める。

「少しは成長したな」

「何かフラグがあっただんで…」

最初の頃は良く吹き飛んでいたな。

彼は受け止めた左腕で私の右足を跳ね返そうとして… 出来ない。彼の顔が青ざめる。

「くくっ… 随分舐められたも… の… だ… なぁ！！」

軸足をぶらさず、そのまま右足を振り抜く。そのまま彼は吹き飛ぶ。

「敵の状態を見誤るな。私がここで合格点出すと思うなよ、ひよっこが！！」

「はいっ！」

すぐに立ち直り愚直なまでに頷く弟子、彼の名前はネティ・ヘリッツ。

年は20になったばかりで、2年前から学院の報酬で私が育てた。

2年前、彼は些細なミス、詳しく言えば、シルバニア国民平均月収半年分の高級な大皿を間違えて壊してクビになった所を、彼の潜在能力を見いだして採用した。

結構大きいミスではないかって？

こちらには平均年収2年分を一気に破壊した、ドジを超越したメイドが居るので彼のミスなんて既に些細な領域ですよ。

彼には徹底的に叩き込み、拳銃や小銃の狙撃や制圧射撃、室内戦から森林や湿地の野戦など、近接格闘とナイフさばき、毒の判別他色々彼の今の実力なら、今の落ちぶれたギルドでなく昔の精強なギルド

基準でAランクに近いBだろう。

だが元だが私みたいに特AとAの差は非常にかけ離れているので負ける気は全然しない。

さて脱線したので戻そう。

「よし、ネテイ、今日はどんな訓練だ？」

人質解放訓練か突発的市街地戦か少数で多数の人を多数の敵から守る籠城戦か、個人格闘か圧倒的不利な状況打開と主人死守か…

「検索です」

「……えっ？」

0930hrs

学院の食堂、図書館、そして生徒が使える会議室や休憩室のある総合棟で、その中で会議室と小部屋の多い二階をとある会議場に見立てての検索訓練が行われる。

作者余談だが、検索とは日本の要人警護をするSP達を使う用語で、主に要人が使う場所を先に行き、丹念にくまなく危険物が無いか調べる事である。

そして危険物を発見次第排除するのを消毒という。

余談終わり。

設定は魔術師の集会の会議場に複数の不審人物の出入りを確認したという王国公安の情報のもと、我々が検索するという事

この訓練は、2人から3人一組で行われ、巧妙な仕掛けを排除する。ちなみにサプライズ企画もあるそうだが、嫌な予感しかない。

そして私達の番。

仕掛けは毎回変わり、時には全部屋、時には全く無いというかなり恐い設定。

私が先行して、ネティが後ろを付いてくる。

今までの子部屋には仕掛けが無かった。次は会議室。警戒しつつ廊下突き当たりの会議室にたどり着く。

まずドアノブに毒針の類が無いか調べる。次にドア数センチ開けて、ドアを開けきるとワイヤーが切れて何かが発動するトラップが無い
か調べる。

調べ終えれば、私は警戒のハンドサインをする。ネティは頷き軽く足を曲げる。

ドアを開くと、すぐに彼は飛び込み周囲を警戒する。

「誰も居ませんね……」

と、ネティは言いながら、しきりに私に向けて上を警戒と示す。

成長したな。私も気づかないふりして

「そうだな…よし、ちゃちゃっと済ますぞ」

「はい！」

2人で広い会議室の中をくまなく検索する。

「これは…」

「あつたか？」

「はい…盗聴器です」

ネティの手に持つのは電池式盗聴器

「実は俺も見つけたぞ」

私は議長席に見立てた机の裏側にもある。

そして残りの一つは大胆にも会議録音用高集音マイクの3本の内の1本だった。

「ふむ、こんなものかな。楽勝だったな、ネティ」

私が声を掛けると、彼は笑みを浮かべ

「まだありますよ師匠」

「そうだったな、メインディッシュはまだかな？」

私の言葉を終える刹那

突如天井が抜けて5人の男が落ちてくる。

1人は判定員、他全員敵役の戦闘執事、楽勝だ。

「そっちの2人は任せた！」

「了解です！」

私の目の前の2人が机を飛び越えて向かってくる。

馬鹿めが…

最初の1人は上手く避けて足をかけると派手に転ぶ。

しかし次はまだ執事としては新人だが戦闘はベテランで体格が巨体の男だった、私と敵で取っ組み合い、しかし奴の方が力がある。

足かけして地に伏せようとした時

ドンっ！

「やべっ！」

足が片方浮いてる状態をつかれまさかの押し倒し！

だが…

「一緒に落ちようぜ！」

手加減は出来ない、敵の襟首を掴むと、体を捻らせ逆に組み敷く。

「ぐっっ！」

まさか細身の私にここまで力があるのが予想外だったみたいだ。

あとは力を込めてマウントしながら首に拳を置く。力を込めれば首が折れて死ぬ。

勝負はついた。

「勝負あり！チェーニ、ネティペア、サプライズ含め合格！」

判定員の宣言をもって、この訓練は終わった。

1200hrs

学院執事待機室

「お疲れ様です！師匠」

「ああ、お疲れ」

待機室は各々厳しい訓練が終わり、皆一様にほっとしている。

ネティもその1人だ。

「ですがサプライズは凄かったですねえ」

「あれは異例だが、有り得ない事もない、まあ良く気づいたな」

「はい！師匠のおかげです」

たく、本当に元気で真っ直ぐすぎるな…だが

「でもま、これからは師匠ではなくなる」

「えっ…？ま…まさか」

おっ、察しつついたか？

「クビですか？！」

「誉めた直後にクビとかどんだけ私を鬼畜と思ってるんだ？！馬鹿か！」

「いたあ！」

思わずチョップを入れてしまう。彼は頭を撫でながら

「では…」

「ほい」

「??…!!!!」

彼に渡したのは回復を司るものであり、イルミナル家が信仰する女神の持つ延命の水を模した銀細工。イルミナル家に務める使用人の証。

「これからはお前は私と同じくお嬢様を、ひいては誇り高きイルミナル家の盾となり矛となる。合格だ、今日からは仲間だ」

ネティは震えて

「本当に…いいんですか？自分戦闘は出来ても使用人としては」

「安心しろ、しばらく私の補佐をして学べ、なあと、ユウよりはマシだ！」

私は笑う。そしてネティは

「ありがとうございます！！！！これからは今までのご恩を含め、こ

のネテイ、働きます!!」

「そうか、そしてもうちょっと声下げろ」
周りが注目してしまってる。

「あはは、済みません」

彼は苦笑して私も苦笑する。

しかしこれで戦力は拡充した。

お嬢様をお守りする使命は万全な体制として、今、完成された瞬間だった。

師匠と弟子（後書き）

ネティの愛銃は次回紹介します。

閑話 この家はおかしい ネティ視点（前書き）

全く話が進展しません。

次回からは急展開、とある人物を悪者に・・・。

閑話 この家はおかしい ネティ視点

ネティ視点

イルミナル家のリュミエールお嬢様にお仕え始めて約一週間。

どんな事が待っているのか…公爵家の使用人の優秀さに埋もれないか…。

期待と不安が入り混じっていた…

結論、有り得なかった。

いや悪い意味ではなく、むしろ私には天国です。

まずお嬢様

学院で生活してましたので私は恩返しに行事準備や清掃、備品整理など事務業務をしていた時に、お嬢様から過去に一度労いのお言葉を頂戴しましたが、正直生徒会長として学院で良い顔してるのではないか…と思ったら。

配属初日から笑顔で迎えてくれて、しかも私の事を覚えていました。会えば挨拶を返してくれて、お嬢様の身の回りを手伝うとお礼までしてくれる。

クビになった、前の伯爵家と比べるのは申し訳ありませんが、お嬢様の方が圧倒的に仕えがいがあります。

そしてお嬢様の笑顔は何よりの報酬といつも語っていた師匠の意見に賛同です。

次に同じ従僕で先輩のフェン先輩

生真面目の一言につきます。

お嬢様の登下校の車の専属運転手であり、邸宅では他の使用人と共に清掃や備品管理、修繕を全般にやっています。

なぜ彼が学院でお嬢様のお付きをしないのか、一つは師匠が完璧な

点がありますが、それよりも大きいのはメイドのユウさんですね。彼女のために学院にとどまらない理由ですね。

最近やっと2人の間で相思相愛が確かめられたそうです。

エリートの士官学校卒業の元王国軍中尉とあって、頭の良さも抜きん出ています。

年収にすれば二倍で、更に100人近い部下を有する将来有望からこのように使用人になったかは分かりません。まあこのお嬢様の下なら気にならない・・・ああ、毒されてきた。

そしてフェン先輩の彼女と噂されるメイド、ユウさん

まず一言、大丈夫か？

皿を多く持ちすぎて危険、ワックスがけしようとして靴墨を塗りたくったり・・・とにかく殺意を越えて呆れて、あの恐縮しきった時の瞳は私達の母性をくすぐり、怒る気も失せてしまう。

料理は得意なようですが、クッキーやマフィンは外見と匂いは無害、しかし食べると師匠も昏倒するレベルだそうです・・・怖いです・・・。

しかしこんなドジと生真面目なカップル、面白い組み合わせですね。

この家の侍従長で師匠が尊敬する人、ルノーさん

姉御肌で私に作法と従僕としての心構えを徹底的に仕込んでくれました。

昼は厳しいですが、夜の軽い飲み会にも誘ってくれて、結構貴重なお酒をふるまってくれて凄くいい人です。

と、この家の人たちは個性的というか、凄いというか・・・他の家の主従とは違います。

最後に私の師匠である、チー二さん

私に二年間徹底的に戦闘技術を仕込んでくれた恩師。

そして、筋金入りの紳士……。

お嬢様の為なら何でもする、それを体で表現する男。

卓越した暗殺技術、五感をフルに使った探索術、全てを無に帰す大量破壊術、大陸の大半の言葉を理解して、通信傍受から手紙の横流し、モールスも出来れば軍の機密暗号も解読出来る。

そしてルノーさんに仕込まれた王室でも通じる執事の心構えと作法。それを全て1人の女性に捧げるのだから、心酔者や崇拜者などの言葉では語り尽くせない凄さを持つ。

また、彼はハーレムを無意識に築く、ええ本当に爆発を心から願うくらいに……。

朝、お嬢様から私達に向けるのとは違う笑みを向け、学院に着くと学院週刊報の記者、レン・ヘッドフィルと取材という名の恒例の漫談、そして昼までは警戒してるが、中央塔に居る17と思えない妖艶な雰囲気醸し出すセネルさんと話して、夕方と夜にはお嬢様と話す。

これ以外にも周りには、彼のファンの女生徒が遠目から見ているのが分かります。本当にハーレムですね、御馳走様です。

さらに師匠ですが、イラツと来るのが絶対にお嬢様の方は気があるのに気付いていない……。いや気付いても呪いであまり近づけないらしいですが、近くに居ればそれでいいを地でいってるので性質が悪いです……。

さて、これで一応私の周りの人たちを書きました。
じゃあ最後に私を

私は二年前にとある伯爵家をクビにされ、師匠に拾われ、そしてここに居ます。

得意は近接と中距離、得物はナイフと銃

愛銃は拳銃は軽量のグロックシリーズに対抗して作られた名銃、H

KのUSP、小銃は小国ながら最も戦争慣れしている国家が開発したIMIガリル、重たいが、弾は多く装填出来て、戦争に必要な耐久性を持つ重量型だ。デザインもスマートに見えて、持った感触も良い。

まあ紹介も終わりましたし、現在の状況をお知らせします。

現在の状況、それは

「師匠・・・どこ行っただんですか？」

師匠は週刊報の記者のレン様に拉致されて、そして私はレン様があらかじめ仕掛けてた拘束魔法、「バインド」の魔法陣を踏んでしまい締め上げられています。

どうしてこうなった・・・。

てか助けて下さい・・・。

呼ばれた先には真実の目（前書き）

難産の上でこの出来です・・・申し訳ありません！

呼ばれた先には真実の目

ネティがトラップに掛かり、私は寸ででかわした後、仕掛けた本人、レンが現れた。

取材の為に突撃はあるが、こんな挑発じみた罠は初めてで、一応注意をしようとしてやめた。

しかし彼女はいつもとは違い、真面目な表情で付いて来い…てかついて来ると涙目の懇願。

しかも

「お姉ちゃんが直々に、来ないと言ったら生徒会長の危機と言え」と、ぼそりと言。お嬢様の危機？そんなこと言われたら付いていくしかないません！

え？ネティですか？罠を見抜けなかったのではばらく拘束されてなさい。

6 / 23

1220hrs

学院総合棟図書館地下

レンに連れられたのは図書館の蔵書庫の下

照度を落とした蛍光灯の下、薄暗く、広大な空間には何十列もの本棚と資料保管の引き出しが並ぶ。

総合棟が存在する前から地下に存在している資料格納庫、現在は真上に図書館も出来ているので、古い本や大衆雑誌も一時保管されているが、奥には一部の人以上立ち入り禁止区域、それこそ禁術書や魔力が込められた本が多数存在する。

そしてその立ち入り禁止区域の中にある、書棚群の中にぽっかり空いた空間に、大きめの机と椅子が数個。

「さて、私達の秘密の場所にようこそ」

「何でこんな所に入れるのですか？」

「私たちヘッドファイル家は非公式ながら数少ないこの禁止区域立ち入りを許可されているので、だから少し改造して密談に適した場所にしたんです。お姉ちゃんが」

珍しく呆れているレン、改造って…ていうか

「お姉ちゃんって…」

「お疲れ、レン、そして帰りなさい」

笑顔

「えっ…でも…」

「帰るか黙らされるかどっちがいい？」

にこやかな笑顔で握り拳を作る。

「了解です！それじゃチェーニさん！それと女性の救世主の正体特集をもう組んじやったので今度会った時は取材決定です！」

「ちよつと待てや！やらないからな！」

「聞こえな——い！！」

「おいこらっ！」

「あの、私の話もとりあえず聞いてもらえませんか？」

「ああ、申し訳あります…でかレン？」

「軽く失礼な言い方ですね…」

私の目の前にいるのは顔立ちがレンを大人びた風にして、茶色のジヤケットを羽織り、胸ポケットには色んなペンを差している。

一見すると…

「記者？」

「そうです。初めまして、レンの血のつながった姉にして、ダーリア・クロニクルズ記者、シーク・レティアル、昔の名前はラン・ヘッドファイルです」

「ダーリア…真実の目が何をしに来た」

「まあまあ警戒しないでください、殺戮機械。基本回避不可能な妹の拘束魔術をたやすくよける瞬発力、おみそれしました」

「……」

「あれ？逆効果？」

シークはてへつとしてるが、絶対にわざとだ。

一気に警戒心が高まる。まあこの組織に属するものなら私の正体を調べる位容易いだろう。

ダーリア・クロニクル・・・名の通り、この惑星で唯一の大陸、ダーリア大陸の年代記を作成し、毎年その年に大陸で起きた事件を片っ端から紹介して、発表する会社。

しかし裏では国家の秘密情報局以上の伝手と通信網を持ち、社長以上にはベールで包まれた盟主の下、注目記事や闇の事件の真実にはどんな犠牲を、文字通り自分の所のジャーナリストが死のうが、報復で組織の攻撃を受けようが調査して発表する、上から下まで、命を捨てる危険な行為を毎度犯して真実追求を求めすぎている結社である。

そして私が元々属していたギルドで受けた依頼で起きた事件の闇の部分进行调查しようとして、度々ぶつかってきて、争っていた。

そこから畏怖と敬意を込めて「真実の目」と呼んでいた。

「まさか子爵令嬢とあらせられる方がなぜ名前を変えてこのようなことに？」

「簡単に言いますと、この学院を10年生の時に勝手に辞めて、週刊報の実績を評価されスカウトされたこの会社に入社して、家から勘当されました。今は慕ってくれるのはあの妹だけです」

「・・・何やってるんですか？」

心から突っ込む。彼女は魔術師で貴族でこの学院の卒業という、この国、いや、伝統主義陣営では一番の出世街道をコースアウトして、昔の私の居た最下層に落ちるなんて・・・

「後悔は？」

「真実を知りたい私にはうってつけの職場ですから、全然。もしもの時にはもしもの時です。さて、前置き長くなりました、本題に移りましょう席にどうぞ」

途端、空気が変わる。私は席に着くと

「さて、お嬢様についての話があると聞いたが？何かあるのか？」

「なかつたらここには居ません・・・単刀直入に申し上げます。一週間後の華の夜会、ここで現生徒会長の運命が決まる」

「？、何の冗談だ？」

私は思わず吹く。運命だと・・・？

「何の冗談だ？」

「冗談だといですね、これどうぞ」

シークは私の目の前に資料を置く。表紙には最重要機密・・・てか「王国紋章付き国家機密・・・あなた・・・死ぬ気か？」

シルバニア王国王族が直接機密指定にした、表に出ることのない資料、これを奪った者は、即時、手段を選ばず抹殺される。

「ばれなければいいんです、中身をどうぞ」

彼女の笑みを見て、武とは別の怖さを感じた後、その資料を見ると・・・

「勧告書・・・て・・・」

シルバニア王国軍フェルザーノ学院介入と警備、そして魔術を組み合わせた新兵器開発の同意・・・

学院には警察、軍、更には王国の学校に介入出来る教育省ですらこの学院の自治権介入は出来ない。これは伝統主義陣営内で定めた、魔術師特権を守るため、

そして軍事転用しないのはいつの日にか言った、兵器に転用する技術が無い、仮に出来たとすれば、それは恐るべき兵器となり、大陸最大の超大国、ティガ連邦も警戒して大変な事態になるからだ。

内容はあまりに衝撃的である。

しかし

「王国軍がこんな勧告書を出すとは・・・王族と軍の仲の悪さは常識だが」

魔術重視の王族と、国を命がけで守ってるのに、魔術師による文民統制で、国防省あつても上からの命令にイエスしか出来ない軍、今までなら軍事費を出せば一応黙ってたのに・・・彼女はやれやれと

いった表情で

「同じ伝統主義でも、こちらはやり過ぎてしましまして、対立は既に最終局面、もはや革命を起こさんばかりにまで来ています」

「そこまでか・・・」

私は資料を返すと、頭を抑える。革命が起きるものなら今度は王国軍までお嬢様に向かってくる可能性も無きにしもあらずだ。そして気付く

「じゃあ今度の夜会で選ばれるフェルラ王子とハルネス様は・・・」

「王国軍の重鎮一家の娘を王族に入れることでの、文民統制維持で軍の直接政治介入権限を与えたも同然ね、これで今まで腑抜けの官僚に代わって、鬱憤が溜まった制服組が乗り込める」

あの副会長は生贄か・・・少し同情してしまう私

「しかしもう手遅れ、遂に彼らは最終通告にして、最大のこの学院の門戸開放を要求したの。政治介入とこの二つが呑めなければ、特権ある魔術師を潰すと・・・」

「なんてこったい・・・もう・・・」

私は目の前が暗くなる、あゝ、これはお嬢様成分が必要だ・・・

「あゝ、あと」

「まだあるんですね、そうですね」

まだそのお嬢様の運命について聞いていない、

「これに対して、王族は、軍が調子に乗らないように、聖地の学院に介入されない為に、王族の命令が学院にすぐ反映される体制を整える為に、フェルラを生徒会長にして、一手に牛耳る計画があるんです」

「軍からの自治権侵害の次は王族からかい！」

どっちに転んでもこの学院の完全なる自治権の喪失が起きる。

てか・・・

「お嬢様は・・・？」

「そう、現生徒会長は有能で魔術師の今後を引っ張る重要人物、しかしこの水面下の内戦に耐えられる裏のコネもないし、純粹すぎて

真正面から突っ込むタイプで実力も未熟・・・つい先日、副会長が陛下の手紙で文化祭予算にいちやもんつける理事会を黙らせたらしいね」

「ああ・・・そうだが」

忌々しいあの日、お嬢様の努力を・・・

「それが公式の記録で副会長の実力だけで成功した事になってるの、更に言うと、現生徒会長は副会長の威を借りた狐とか、ルックスと頭の見せかけで、実は生徒会の仕事は無能だとか・・・と、ほら吹く者たちが突如現れました」

なん・・・だと・・・そんな一大事を見逃してたとは・・・不覚・・・あまりに不覚っ！！

殺そう・・・後でそれに関わった奴ら全員殺そう・・・。

彼女は私を見て苦笑いしながら

「まあ現在の所は素人たちの非効率さと、あなたみたいに生徒会長の實力を知り、心酔者が防諜したから被害が広がらなかった・・・まあそれは想定範囲内・・・しかし・・・」

彼女は一泊置いてから、また表情を戻し

「華の夜会、王族のメンツがあり、全ての失敗がたとえ理不尽でも生徒会長に責任問題が発展するこの会、ここで何かが絶対に起きます。そして地位も名声も全て奪うはずです」

「なぜそこまで執着を？」

何とか氣を取り戻した私は聞く。彼女は、推測ですが・・・と前置きしてから

「軍の介入阻止の為に学院の一時支配を皮切りに、現生徒会長を失ったら、魔術師の最高峰、魔導院は誰を後継の長に思うと思いますか？」

「それはもちろん、王族クラス、特にシルバニアの・・・」

私は止まってしまう・・・まさか・・・

「そう、王国軍の牽制、そしてシルバニア王族の魔導院の支配、そして・・・実は、魔術と現代医療を取り入れて、上流階層からスラ

ムの人に慈善活動と病院業をするイルミナル家と王族の密かな対立の決着、もちろん生徒会長の責任を家の責任にして爵位剥奪や迫害とかをね……」

「……」

彼女の意見は突飛だ、しかし、今までの話を聞く限りでは……私には戦慄が走る……来週……何が起こるんだ？

「どんな計画が夜会の日に待っているんだ？」

「それは分かりません。本来は見届けて、ヒントは出さないのが原則ですが、私もこの学院には一応思い出もありますので可能な限り調べましょう、五日後のこの時間、ここでまた会いましょう。ああ、あとこのことは他言無用で……それでは……」

彼女は地上に出る階段の方に向かって歩く。

「ふむ……情報を集めるか……」

お嬢様が笑顔で学院に居られる為に、家に汚点を付かせない為に……

・

見てろよ、お嬢様を愚弄する者ども……私の手で……お前らを潰す！

殺戮モードとは違う冷たい目で、チエーニは決意を固めた。

潜入（前書き）

近日中に投稿予定の次話で夜会での陰謀の全貌が分かります。

潜入

6 / 27

1700hrs

フェルザーノ王立学院中央塔屋上

「ししょ…チエーニさん」

「いい加減慣れろ、ネティ」

私が振り返ると、ネティが階段から現れる。未だに師匠と言いかけるが、今は同じお嬢様の下で働く人間なので名前で呼ぶようにさせている。

「で、資料は？」

「済みません。こちら側には」

「ん、まあ予測通り…か」

真実の目から伝えられてから4日間、明日までに夜会で行われる陰謀の計画を調べ上げたかった。だからネティと私で学院の隅から隅まで徹底的に探した。

「はっ？もしかして当たりつけた上でここまで徹底的に？」

「理事会が本当に偏屈で実はここにという、意外な隠し場所を持つ可能性もある。そして出来れば私は行きたくない場所だから」

「行きたくない場所？」

ネティが首を傾げる。私はため息を吐きながら

「ときにネティ、問題だ。理事会が多く出入りしても不審に思わず密会出来て、なおかつ関係者以外には絶対防備で無理して通ろうとすれば命の保障は出来ない場所…分かるか？」

「理事会が出入り出来る…？」

「ヒント、お嬢様の執務の場所」

「……、ああ！生徒会棟！」

「正解だ、大胆だが、理事会なら専用の部屋を使えば秘密は基本的に漏れないからな」

ネティが答え私は頷く。

「しかし、あそこには固有結界が…」

ネティが心配するのは、生徒会棟に入って目の前にある二階に続く階段の先には生徒会長室や理事会の会議室、重要情報の管理室へ繋がる為に24段ある階段の12段目に電磁結界がある。また他の方法での侵入も考え、二階の窓なども結界が張られている。

「学院でのあらゆる状況に備えて、昔その結界について調べたが、あの結界は毎日23時から5分間、力が弱まり、魔術師はやられても私達みたいに鍛えている者なら何とか通れるんだ。ただし、非常に厄介なのはその後、結界がセンサーの働きをして、宿直教員の攻撃魔術師に緊急警報するんだ。後は学院の機密漏洩阻止の特例に基づいて殺される可能性が高い」

「逃げる事は？」

「特殊な筆とインクで描かれた絶対に消えない魔法陣で瞬間移動してくるらしいから無理だな。更に言うと、ここの教員は優秀な学生に教えを授ける為に集まったトップクラスのエリート集団、無詠唱で確実に単体を殺人する魔術もあるはずだから、気絶させて無傷は難しい」

「本当に命の保障がありませんね…」

ネティは苦笑する、だが私は真面目な表情で

「しかし先に叩けば問題ない。ネティ、仕事だ」

「なんなりと、どのように・・・あつ、教員とガチの対決だけは勘弁で」

「望むなら？」

「望んでません！」

ネティは真剣な表情で宣言して、私は少し笑ったあと。

「じゃあ・・・宿直室に通気できる部分を探せ」

「・・・はっ？」

大真面目な表情で言う私にネティは固まる。

2255hrs

学院生徒会棟階段前

一度お嬢様と邸宅に戻り、一通りの仕事の後にまた学院に戻ってきた。

生徒と教員のほとんどが家か学院寮に帰り、昼間とは比べものにならないくらい静けさと闇で支配される。

特に生徒会棟は全部の校舎の中で一番古く、今年で120年目であり、歴史の深さも相まって独特の雰囲気醸し出している。

「それにこの結界だからな」

私は静かに呟く、目の前にある大きな階段の真ん中には、ぼうつと薄く青がかった光の壁が、認証された者以外の立ち入りを拒む。昼間は建物の採光で見えにくいが夜になると不気味に光る。ここだけは警告を込めて色付きだが、二階部分の周りには無色でこの結界が覆われている。

眺めていると、背後の入り口の扉が開く。

「済みません！遅くなりました」

振り返ると扉を閉めてこちらに来るネティの姿

「予定より手間取ったな…結果は？」

「もちろん成功です、良く眠っています、仕掛けもしっかり回収しました」

「結構」

私はネティの成功の言葉に安堵する。

彼は邸宅に戻らず、宿直室の換気などの通気口に繋がる配管を通じて、気体で副作用の無く、即効性のある催眠ガスを撒き、甘い匂い

を感じた時にはすぐに意識を奪う代物を用意し使用した。

これにより、宿直室には教員以外は立ち入った形跡も無く、証拠もない。

これで面倒な対魔術師戦闘は無くなる。

まずは第一段階クリア。

「よし、第二段階に行くぞ」

「了解です…その前にこの壁…電気通っているのに、普通の格好でいいんですか？」

「大丈夫だ、これを使う」

取り出したのは一本の黒く短い棒

「これは？」

「特殊加工された強力な集電棒、まあこれで壁に流れている電流を一時的にそちらに集めてうちらに害は無くなる」

「ほう」

ネティは興味深げに眺める。私は時計を見ながら。

「カウント10から始める。0になったら突撃だ」

「了解」

目は自然と厳しくなる。

短針は11、長針は間もなく真上

そして

「10」

私の言葉でネティは構える

「5・4・3・2・1…GO!!」

私は思いっきり棒を上にとげると、壁に当たり青白い光が巻き上がる。

今だ！

一気に駆け出し壁に突撃すると柔らかく受け止めてはねのけようとするが、

ビリッ！

電気とは違う音が響く、結界が破れたのだ。

「よしっ！抜けた！」

「やれば出来るんですね」

ネティが感心したように言う。

「第二段階クリアだ、よし、探すか……」

執事として使う白手袋を外し、ギルド時代から愛用している店で調達する黒い手袋をはめて、ニヤリとする。

「おお、プロだ」

ネティは苦笑しながら付いていく。

そして理事会専用室で見つけた資料、それは

「笑えねえ……そしてゆるさねえ……」

チェー二の怒りの導火線を着火させるのに十分だった。

報告と計画の全容（前書き）

次回、やっと華の夜会&お嬢様が登場、そしてチエーンを通常よりも、更に暴走させたい。

報告と計画の全容

6 / 2 4

1 3 0 0 h r s

フェルザーノ王立学院総合棟図書館地下

相変わらず薄暗く整然と並ぶ書庫群を抜けると。

「5日ぶりね、どう？調子は」

「気分は最悪だ…それより優雅だな」

「どう？結構高いやつだけど、飲んでみる」

「結構」

「ざんねん」

私はため息を吐きながら席に座り優雅に紅茶を楽しむ、ダーリア・クロニクル記者、シークに言う。

昨夜、生徒会棟に忍び込む…またの名を突撃した後には探索をしたが、私にとって衝撃を与える内容を見つけてしまった。

その前に

「そちらはどうだったんだ？」

私が聞くと、彼女はカップを置いて首を横に振り

「残念ながら有力なものは、ただ、夜会の翌日にも軍の制服組は一応国防省を通じて、有事の際の貴族、魔術師特権の制限案を発表するらしいわ。今までは門前払いだったけど、軍人家系の息女を王族に迎え入れる婚約をしているから、要求は全部でなくとも一部は完全に呑み込む。あと、オフレコだけど、同時に軍の魔術兵器開発を拒むなら、茶番は終わり、革命も辞さない…」

「なるほどな、だから奴らはこんな手間を…」

手元のコピーした計画書を見やる。彼女は乗り出して

「それは、この学院の紋章ですね。昨夜の生徒会棟から見つけたのですか？」

「もう耳に入ってますか」

予測はしていたが…

「私も一応部下を持てるレベルですからね、新人君に追跡させました……それで、その計画書にはなんと？」

「ああ、中々やつてくれるぜ」

計画書を彼女に差し出す。彼女は読み始めて……しばらく無言になる。そして計画書を置くと思を吐き出して

「まさかここまでとはね…王族も嫌な事を…」

作戦の中身、それは

違法傭兵団による夜会占拠と身の代金要求

「この傭兵団は約束を守り腕が良くても、報酬以上に略奪などが有名で傭兵協会からは除名されて、紛争する軍も採用どころか監視をしている悪徳だ。利用者は主に地方の独裁者が反乱鎮圧に使ったりする」

私がギルド時代からこの組織には黒い噂と低俗な部隊と聞いている。彼女も察して

「この部隊が夜会を占拠更に身の代金を要求されたら一大事。恐らく学院自治権の問題や自国や他国の要人も人質に取られるも同然の国際テロ、簡単に屈服しても疑問は無い傭兵達が何故ここを狙ったかという不自然な疑問もあとでどうとでもなる。更に違法傭兵団を一括監視する王国軍の体制に疑問が持たれて信用が落ちるし、王族他魔術師優勢の議会はそれ一気に攻撃出来る」

「あとは、事件後には、自分達の行動は棚に上げて軍は信用出来ない、今までは制限されていた攻撃魔術の解禁と、学院の束縛、そして……お嬢様の更迭も出来る」

無意識に最後の部分に怒りが籠もる。

お嬢様達をこのような危険な目に遭わせてまでやりたいことは、私

にとつては不愉快でしかない。

「どうどう、落ち着きなさい。でも、傭兵達を見過ごすのなんて、どうやって…」

「そしてこれがトドメだ」

もう一つの紙束、

「これは…はあ」

「一週間前に隣国のレニア共和国を見張る王国軍国境警備隊に傭兵達を素通りさせるよう買収、軍の警察である警務隊の買収、そして傭兵監視の情報局第四課の怠慢、もとい軍上層部とは別の勢力による買収と圧力と黙殺、……実際にこれに協力した人間は名誉除隊の高い年金生活か王族が仕切り、軍が手が出しにくい部署に栄転して反論した人間は飛ばしたと記載されている」

「火消しは難しいわね…いや、もう手遅れ…絶対に王族サイドは買収の証拠隠滅するから美味しすぎる攻撃材料ね」

やれやれといった表情を見せるシーク。

「理事会はよく賛成したわね…いや、目の上のたんこぶを潰すなら多少の暴力やむなし…失敬、口が過ぎました」

私の目が自然と鋭くなる。彼女も察して発言を控える。謝られたら責める事もないので続ける。

「まあ、奴らは先遣斥候6名、大型トラック数台に分けて乗車する本隊40名、あと学院裏から潜入する別働隊が10名、合計約二個小隊近く、既にこの近くまで来て潜んでいる可能性は高いです」

「あなたなら何とかしてしまいそうね、策は？」

彼女が微笑みながら聞く。私は苦笑して

「私と、イルミナル家の男たち総出…ても3人で、当たりをつけたエリア搜索しても、奴らはサバイバルのプロ、トラックなど大型から銃や道具の小型まで全ての器具、人員を上手く隠すので時間が足らない。だからといって水際戦闘も難しい、学院に上陸されれば、戦闘執事も応戦してややこしい事態になるし、どちらにしろ失敗だ。

だから中間を取る」

「中間？」

「ああ、敵を中間点で撃破する、そして軍は買収問題と傭兵の跋扈によりしばらく黙り、王族もこの大掛かりな自作自演の反動で黙らなければならなくなる。まあここはダーリア・クロニクルがゆすりをかけてくれると嬉しい。結果的には痛み分けで両陣営を黙らせる」
彼女が少し思案してから、まさかと呟いて

「市街地戦をするつもり？」

「まあ、一部はな」

私が言うと、彼女は

「でも場所は分らないって…」

「さっき言ったが拠点と思いきエリアのあたりはつけてある、ここだ」

私は胸ポケットに忍ばせてあった小型にまとめられる地図を出し、お嬢様の邸宅方面で、更に山道に入るエリアに大きく丸をつける。

「ここならトラック通れる道が整備されて、人は居ないし、自然で勘は鈍らないし、訓練も出来る。そして迎撃地点はここと、ここ、別働隊はこの時点で一緒に仮定して殲滅する」

街に入る手前とお嬢様の家と敵が居るとされる道が繋がる分岐点に丸を付ける。

「何でここに居ると分かるのかしら？」

「王族サイドから考えるんだ。傭兵協会の傭兵ならまだ信頼出来るが、こいつらは無法者の集まり、約束は守るにしても街に放したら」

「ややこしい事が起こる可能性なきにしもあらず…か。確かに治安を考えれば妥当、相当金を積んだんでしょね」

彼女は汚いものを見るのかのように眉をひそめる。

「まあ、そういうことだ。それでシーク、頼みがあるが…」
「兵隊の調達かしら？」

彼女の確信めいた言葉に、私は頷き

「話が早くて助かる。絶対殲滅を目標とする私たちには戦力と時間不足は否めない。短時間で、出来ればこの騒ぎで人や警察が来るまでに叩き潰すには兵隊が必要だ。だが、学院側にはこの秘密をバラす信用に足る人は居ないし、実力不足だ。だから、そちらの伝手で、工兵含めて二個……いや一個小隊で十分だ、傭兵を集めてくれないか？」

ギルドを裏切った私が傭兵探しをするより遥かに効率が良いと考えれば妥当だ。

彼女はしばらく考えて

「うちには、一応傭兵協会に属しながら完全に我が社専属の傭兵団が居て、取材の為に集まる我が社の記者の護衛を含めて一個中隊、王都に集まっています。真実の目のごとく、基本介入はしない主義ですが、今回のケースは国や国際関係を左右するので、要請すれば派遣してくれる可能性は高いです、いや派遣させてみせます。代わりに今回の事件の顛末の全て、しっかりと見届けさせて頂きます」

「協力に感謝します」

頭を下げる。これで皮算用だが舞台は整った。

彼女は立ち上がり

「それでは私は、報告と準備がありますので、それと派遣される部隊は夜会当日になる可能性が高いので、色んな可能性を考えて下さい」

「了解した。頼んだぞ」

「ええ……あつ、そうだ、一つ、場違いですが質問いいですか？」

「ん？いいですよ」

「ありがとうございます。では」

私は顔を上げる。協力者だから無碍に出来ない。彼女は意を決して「あなたの経歴を見る限り、決して人に懐こうとするタイプでないのに、何故今、才能の無駄遣いをしながら生徒会長の執事をしてるのですか？」

「本当に違いますね」

私は思わず苦笑する。彼女も苦笑しながら

「記者仲間や課長に殺戮機械と共同戦線していると言ったら、オフレコでいいから取材してこいって…」

「ふむ…」

彼女の言葉に納得する。まあ、私がこんな事をするのは、裏の世界の人間には衝撃だろう。

「一言で言えばお嬢様への返しきれない恩と私の中に芽生えた絶対的忠誠心、そして日常をくれたからかな」

「日常…」

「ああ、朝起きて信用出来る仲間、親愛なるお嬢様の顔が見れて、お嬢様が授業を受けている間は空が見れて、邸宅に帰れば仲間が迎えてくれる。本当の一般人から見ればまだまだ変だが、闇に吞まれ、生きてるのかどうなのか、信頼出来るかどうか分からない昔に比べれば私にとっては全てが天国だよ」

「なるほど」

彼女は頷いた後

「もう一つだけ、よろしいですか？」

「ご自由に」

「それでは単刀直入に、そのあなたの忠誠心とは、生徒会長への愛情で出来ているのですか？」

「もちろん」

思わず即答、シーク苦笑。

私は続ける。

「お嬢様のどんな頼みも絶対に聞き、お嬢様を大切にする人以外ですり寄る不届き者を潰して、もし、過去がばれて、嫌われて断絶されたら、視界に入らない所で私はこの命尽きるまで奉仕する所存であります」

呼ばれればどんなに遠くとも手段を選ばず向かいます。

ストーカー？何を失礼な。

「ハハハ…重症ね」

「失敬な」

彼女は思わず笑ってしまい私はムツとする。

ごめんなさいと彼女は言ってから

「これでお土産話も出来たわ、取材協力ありがとうございました。それじゃ」

「傭兵の件、頼むぞ」

「了解です」

ヒラヒラと手を振りながら彼女は立ち去る。

そして残った私は、二日後の決戦に備えて、作戦の組み立てを考えながら外に向かうのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5365y/>

元暗殺者現執事

2012年1月7日02時48分発行